

カレイドスコープ

川柳文学コロキウム会員 自由吟自選作品

「川柳文学コロキウム」
No.48 より

戦争を知らない知らない方がよい
望月 弘 静岡

臆面もなく良心ゼロの鳩が舞う
夏井せいじ 新潟

かくれんぼ時効になった箱の靴
小西カツエ 大阪

もう何も言わない人の喉仏
久恒邦子 京都

忠誠をカネに誓って辞めました
中前棋人 静岡

ブラックをがぶ飲み負けていられない
内田久枝 島根

犬と散歩だんだん犬になって来る
熊谷岳朗 岩手

如月のずば抜けて濃い夜の窓
笹田かなえ 青森

来世も貴方に添うと脅される
太田 昭 大阪

バス停にトトロの靴が脱いである
岡谷 樹 奈良

履歴書に表の顔を羅列する
毛利由美 茨城

刻まれてみんなサラダの皿の上
星井ごろう 新潟

船と船どう違うのかふと疑問
伊藤益男 千葉

小川一子 大阪

暗号が解けたらひとり旅に出る

三村一子 大阪

わがままは胸の谷間で気化させる

三上博史 栃木

八朔の酸っぱさ今という時

井丸昌紀 大阪

こんな時亡父はどうしていただろう

桂 晶月 大阪

甘皮を剥がす共犯者の顔で

森下よりこ 和歌山

奥様は魔女で恙ないわが家

別所花梨 島根

きらきらの天使空から降りて来た

早泉早人 大阪

真っ直ぐに生きて来たので折れやすい

小川しんじ 大阪

ノンアルコール下戸を益々下戸にする

中井アキ 大阪

流水に狙われている邪馬台国

河村啓子 京都

いきっていて生きていてほし大地震

嶋澤喜八郎 大阪

いい知らせ聞くのはいつも右の耳

熱田熊四郎 島根

唇の裏で反論くりかえす

中野六助 京都

柱の一本は語り部になった

「川柳文学」ロキウム
No.48 よの（つぎ）

北 れい子 宮城
聞こえないふりをしている心電図

籠島恵子 大阪
辛抱をなさい アドバイスにならぬ

牧野芳光 鳥取
説明会に角を生やしてやって来た

新川弘子 大阪
祭り好き笛や太鼓で血が騒ぐ

石橋芳山 島根
ガラパゴスケイタイ齧り付くそうな

合田瑠美子 大阪
円錐の形のまんま燃え尽きる

河津寅次郎 大阪
消しゴムの屑に詰まっている本音

宮前秀子 大阪
内視鏡 何も見つけず出ておいで

平尾正人 鳥取
シャボン玉消えた天変地異の中

松原未湖 福井
アウトラインにぶらさがる蝙蝠たち

こはらとしこ 福島
人間は歩けるきつと立ち上がる

南野耕平 埼玉
あらためて日常という万華鏡

水品団石 静岡
観察をしているようでされている

西内朋月 大阪
いらいらがやっと緩んだ瓶の蓋

「川柳文学」ロキウム」
No.48 よし(つぎ)

山本洵一 東京

君は誰？帽子ブーグル大マスク

西 恵美子 宮城

マニュアル通り咲かぬ堇も蒲公英も

大石一粹 秋田

縦割の図式に私語を眠らせる

赤松ますみ 大阪

わたくしが試されている試験とは

大石一粹

秋田

飛行機雲仰ぎよりみちせず帰る

河津寅次郎

大阪

地図にない橋を渡って行く大志

松原未湖

福井

久恒邦子

京都

巻末に海の白いを綴じておく

早泉早人

大阪

噂好きマンモスの耳凍てている

こはらとしこ

福島

ふるさとの風が吹かなくなりました

月が生まれる真つ暗な森

平尾正人

鳥取

ゾロゾロと疲れた顔で穴を出す

石橋芳山

島根

とんでもないことが当たり前のように

森下よりこ

和歌山

訳ありの棚に並んでいる背中

岡谷 樹

奈良

嘘隠すために飾っているんです

嶋澤喜八郎

大阪

立ち上がるちよっと手前の青いもの

合田瑠美子

大阪

極月や悔いを焼いても煮しめても

孝久美智子

福井

検査は白だるい感じはまだつづく

「川柳文学」ロキウム」 No.47 よし (つぎ)

鏡拭く雪降る夜のかたすみで
笹田かなえ 青森

寒い風吹いてわたしという氷柱
南野耕平 埼玉

艶ばなし兎の耳が折れている
三村一子 大阪

送信を押すたびわたくしの欠片
籠島恵子 大阪

のび切ったうどん庶民への裏切り
星井ごろう 新潟

たっぷりと袂に溜めるごめんなさい
小西カツエ 大阪

STOPを無視する君を許せない
熱田熊四郎 島根

口角を上げて含んだ事を言う
別所花梨 島根

墓碑銘を考えたら死ねなくなった
中野六助 京都

滞納書おまえのハラは痛まない
小川しんじ 大阪

小さな幸みなに話してみたくなる
夏井せいじ 新潟

洗濯バサミ噛みつくことで仕事する
三上博史 栃木

ひらがなを編んでやさしい民になる
望月 弘 静岡

ふんばって見ろよと膝を貸してやる
太田 昭 大阪

「川柳文学」ロキウム
No.47 よろ（ごきり）

この世にはこの世の掟切符買う

小川一子

大阪

食べて寝てまん丸になり退院か

井丸昌紀

大阪

牡丹餅を日本中が待っている

中前棋人

静岡

酒を呑むたびに悲しみ深くなる

新川弘子

大阪

危険水域で吐いた白いあぶく

桂 晶月

大阪

わたしにも尻尾があつて獣道

中井アキ

大阪

インベーターより恐ろしい渡り鳥

牧野芳光

鳥取

結婚後助手席ただの席となる

毛利由美

茨城

鳥になるか天使になるか悩んでる

北 れい子

宮城

性格も読めたでしょうかサインの字

熊谷岳朗

岩手

回転のいつとき止まる大晦日

伊藤益男

千葉

目も耳も半分開き話聞く

内田久枝

島根

また人を好きになつてるレモンハイ

河村啓子

京都

さよならと一言言ってほしかった

水品団石

静岡

「川柳文学」ロキウム」
No.47 よし(つぎ)

西内朋月 大阪

向かい風まともに受ける一番目

宮前秀子 大阪

喜んでボロ雑巾になった母

山本洵一 東京

紅白を見る妻あくびする夫

西 恵美子 宮城

裏漉しをしたりされたりしてふたり

赤松ますみ 大阪

舞台反転 印鑑を捺すたびに

中野六助

京都

はらわたに脱臭剤を詰められる

西 恵美子

宮城

仮縫いのままで整列しています

熊谷岳朗

岩手

恋ですか私結婚しています

石橋芳山

島根

リスイズアペン身に付かぬもの学ぶ

小西カツエ

大阪

回転木馬駅は今まだ見つからず

星井ごろう

新潟

コスモスの散らないうちに逢いましょう

毛利由美

茨城

ありえないとつぶやく臨時休診日

笹田かなえ

青森

こめかみにギュッと色即是空かな

内田久枝

島根

何もかも知ってしまった昼の月

熱田熊四郎

島根

ループ橋 雨はいつしか雪になり

三上博史

栃木

泣き切って雲がゆっくり動き出す

岡谷 樹

奈良

木の匙ですくう茜色のスープ

南野耕平

埼玉

違う風吹いて埠頭というところ

夏井せいじ

新潟

嘘だけが艶艶してて恥ずかしい

別所花梨 島根

風穴を探して君の手に触れる

藍瓶の中で大人になる時間

三村一子 大阪

森下よりこ 和歌山

石垣を積んだ歴史を振り返る

信じてても壊れてしまうミステリー

小川一子 大阪

籠島恵子 大阪

菊人形剃髪前に美しい

このところ鳴かず飛ばずといった日々

伊藤益男 千葉

大石一粹 秋田

少し好き少し嫌いで秋の空

渡されたカードについている指紋

北 れい子 宮城

桂 晶月 大阪

触れているところから抜けてゆくグレー

ポスティングシステム人を売っている

望月 弘 静岡

平尾正人 鳥取

私が浮き出る他者の他者として

毒入りと書いてあるので手が伸びる

井丸昌紀 大阪

牧野芳光 鳥取

うなずいて笑う草食系の武器

メール打つ一つの屋根の中にいて

こはらとしこ 福島

「川柳文学」ロキウム
No.46 よろ (ごきり)

河津寅次郎 兵庫

フラワーシャワーで洗い流してあげる過去

水品団石 静岡

そのうちにパンダが攻めてくる予感

太田 昭 大阪

追憶を辿ると長い夜になり

河村啓子 京都

傾いた母屋の先の曼珠沙華

早泉早人 大阪

靡かないよう前だけを見えています

松原未湖 福井

面接です君は玉子が割れますか

合田瑠美子 大阪

試着室微妙ですねという鏡

嶋澤喜八郎 大阪

ゴールしてから鉢巻をしめ直す

中前棋人 静岡

トンネルを抜けると好きになっていた

宮前秀子 大阪

昭和一桁 噛んでみناهはれ芯がある

中井アキ 大阪

柿熟れて君とゆっくり老いてゆく

新川弘子 大阪

恋ごころスパークさせたのは夕陽

小川しんじ 大阪

値上げした煙草おんなじ味やんか

西内朋月 大阪

ゴミ出し日無理に押し込むゴミ袋

「川柳文学」ロキウム」
No.46 よろ（つぎ）

山本洵一 東京

カサコソと秋の音する僕のポケット

久恒邦子 京都

渋柿のしがみついてる祖父の墓

赤松ますみ 大阪

含み笑いに耐えきれなくなったアケビ

久恒邦子

京都

小窓には小窓の悩み吾木香

嶋澤喜八郎

大阪

雲切れて空の貨物車通過する

星井ごろう

新潟

気を抜くとひげが一本生えている

毛利由美

茨城

コスモスは散りおえみんないなくなる

牧野芳光

鳥取

一日の不首尾を恥じている夕陽

河津寅次郎

兵庫

かたつむりの時間とかげろうの時間

岡谷 樹

奈良

乗り心地だあれも知らぬあかね雲

夏井せいじ

新潟

原点に戻ると二人掛けの椅子

山内美代子

愛知

どんなことにも動かぬ山になってゆく

別所花梨

島根

十七年目亀が人間くさくなる

三上博史

栃木

天国の紐はどの辺から垂れる

中野六助

京都

まるごとの母性愛だな路線バス

中井アキ

大阪

移り香が消えぬ間は動けない

「川柳文学」ロキユウム
No.45 よりの（こしき）

籠島恵子

大阪

平尾正人

鳥取

百日紅孤軍奮闘見ましたよ

溜め息が白い信じてみたい冬

望月 弘

静岡

大石一粹

秋田

エピローグ今日を推敲して終る

人の字がカタカタ鳴って倦怠期

小川一子

大阪

桂 晶月

大阪

鬼灯をやたらに鳴らし終戦日

はじまりはワンセンテンスだけでした

伊藤益男

千葉

熊谷岳朗

岩手

とりあえず今日を支える朝ごはん

おかしいですか半音ずれただけの背

熱田熊四郎

島根

孝久美智子

福井

用心棒すこしやさしく頼りない

落下傘の絹織っていたはるかな日

松原未湖

福井

笹田かなえ

青森

丸くなるまでお陽さまにあてる箱

満月光森はくまなく濡れている

内田久枝

島根

南野耕平

埼玉

苦勞した港へ花束を渡す

来たバスに乗ろうと決めていたのです

北 れい子 宮城
修羅越えて神の返事がまだ来ない

石橋芳山 島根
一列に並んで棒切れの一部

中前棋人 静岡
パチンコに行った帰りは本を買う

三村一子 大阪
誤解から誤解へ夏が過ぎていく

宮前秀子 大阪
わたくしの時間にどっかり予約診

井丸昌紀 大阪
大声で喋る男で頼りない

早泉早人 大阪
コスモスを咲かせて底を這い上がる

新川弘子 大阪
それぞれのスピード守る宇宙です

河村啓子 京都
新月にチカチカさせて会いましょう

森下よりこ 和歌山
仏壇で一人皺んでゆくりんご

西 恵美子 宮城
揚羽蝶うつしコンパクトを閉じる

合田瑠美子 大阪
深追いをしてから石になりました

こはらとしこ 福島
あなたの木やさしい風が吹く木陰

太田 昭 大阪
一人で迷い二人になってまだ迷い

「川柳文学」ロキウム
No.45 よし(じじき)

小川しんじ 大阪
パチンコ屋のごちやごちやにいてみなひとり

水品団石 静岡
告白をスターマインに奪われる

山本洵一 東京
慎重に探る無数の枝分かれ

西内朋月 大阪
目くばせでそつと抜けだす飲み仲間

小西カツエ 大阪
どのきもの着たか去年の秋思う

赤松ますみ 大阪
胸底に蹄の音が鳴りやまぬ

喋り続ける雨軋み続ける私
小西カツエ
大阪

もう泣くなペパーミントを食べなさい
熱田熊四郎
島根

くたびれて帰る故郷に虹が立つ
早泉早人
大阪

モノの雪さみしい影を見失う
中野六助
京都

階段の途中で拾う貝ボタン
合田瑠美子
大阪

嫁の弾くピアノの音が雨を消す
孝久美智子
福井

紫陽花の隣り肩凝り治らない
内田久枝
島根

大石一粹
秋田

追憶の胸には欠けたままの月

籠島恵子
大阪

石段の一段ごとにある景色

夏井せいじ
新潟

どう描いてみても福耳だった父

松原未湖
福井

また白い街に入ってゆく羊

伊藤益男
千葉

不況ではなくて普通に見える街

岡谷 樹
奈良

濃密な時間を閉じる落葉樹

「川柳文学」ロキウム」
No.44 よりの(つぎ)

三上博史

栃木

平尾正人

鳥取

一票の木戸銭で見る政治ショー

ストレスが溜まると破裂する袋

笹田かなえ

青森

毛利由美

茨城

胡蝶蘭うつむきかたを考える

上書きという前向きな忘れ方

小川しんじ

大阪

南野耕平

埼玉

パチンコ屋あんたも俺も駄目おやじ

両隣空席のまま幕が開く

河津寅次郎

兵庫

星井ごろう

新潟

無礼講真に受け出世ふいにする

書いて消す今のわたしができあがる

小川一子

大阪

三村一子

大阪

夕立や自由にされて困ります

あと少しわたしの虹を渡りきる

石橋芳山

島根

北 れい子

宮城

現実はどこもかしこもゴジラの背

雲の形に塗ってあげよう白い画布

西 恵美子

宮城

望月 弘

静岡

こころざし漬物石の下に置く

ここからがワンマンカーの過疎のバス

「川柳文学」ロキユウム
No.44 よろ（ごきり）

新川弘子

大阪

嶋澤喜八郎

大阪

パプリカの三原色が姦しい

灯が消えて知る嬉しさの色かたち

久恒邦子

京都

牧野芳光

鳥取

風下にいつか置かれた青い椅子

悪口を言わせぬように二次会へ

井丸昌紀

大阪

河村啓子

京都

何事もうやむや僕の処世術

コンチキチン母の耳朶遠くなる

山内美代子

愛知

中前棋人

静岡

養殖と大きな文字の鮎並ぶ

痛いとは決して言わない五寸釘

別所花梨

島根

中井アキ

大阪

エーゲ海ひとり占めして飲むワイン

アルバムは幸せそうな顔ばかり

水品団石

静岡

森下よりこ

和歌山

青春を横乗りさせている荷台

化けそうな傘に出合った梅雨最中

桂 晶月

大阪

こはらとしこ

福島

改札を抜けて真綿になってゆく

暴走車もみじ四枚付いている

「川柳文学」ロキウム」
No.44 よろ（つぎ）

山本洵一 東京
潜り続けてたどりつく朝

西内朋月 大阪
長生きをしろよと肩を叩かれる

宮前秀子 大阪
天井のシミにもほっとする我が家

太田 昭 大阪
人生の粗筋を書き子を放つ

熊谷岳朗 岩手
老いたなあ自分に話すことばかり

赤松ますみ 大阪
絹糸を紡いだあとにある静寂

「川柳文学」ロキユウム
No.43 よし

熊谷岳朗

岩手

宮前秀子

大阪

誉められてどんどん伸びる髭である

放っといってくれるやさしい喫茶店

桂 晶月

大阪

望月 弘

静岡

未来形詰めて結んでいるリボン

日の丸は革新にされ保守にされ

松原未湖

福井

石橋芳山

島根

これ以上頑張れませぬ蜘蛛の糸

キレイだと言ったび唇が濁く

牧野芳光

鳥取

熱田熊四郎

島根

蜃気楼目指して舟を漕いでいた

まばたきの合間沸点へと昇る

早泉早人

大阪

山内美代子

愛知

約束を果して戻る島の亀

小包便許す気のない細結び

井丸昌紀

大阪

夏井せいじ

新潟

金もないのに休みが続く

最強の妻と信じて従いて行く

笹田かなえ

青森

いらっしやい眠りに落ちる眼の色で

「川柳文学」ロキウム
No.43 よりの(つぎ)

うれしくて月にまみれるしゃぼん玉
小西カツエ 大阪

どの風が僕の身内かわからない
鳴澤喜八郎 大阪

飛んで来た矢を左手で受け止める
内田久枝 島根

口封じガラスの器とけだした
久恒邦子 京都

年表にまだぎこちなくいる昭和
三上博史 栃木

春の鬱配り終えたか蜃気楼
中井アキ 大阪

鑑真忌いまだ波濤が越えられず
中野六助 京都

バックパスに魅入られ三段跳びをする
三村一子 大阪

黙禱のあいだに服の塵払う
星井ごろう 新潟

どっちでもいいよ晴れでもオマエでも
南野耕平 埼玉

釣れた鰺成仏させるしかと食う
小川しんじ 大阪

三角の窓から首を出してみる
小川一子 大阪

イケメンの形に咲いたチューリップ
別所花梨 島根

完敗もあって男の畳み方
大石一粹 秋田

森下よりこ 和歌山

耳を洗ってアニソンを聞いている

アメリカのお世話が癖になっている

中前棋人 静岡

毛利由美 茨城

合格の報告しない氏子たち

不思議げにおたまじゃくしを見ている子

新川弘子 大阪

伊藤益男 千葉

サバイバルゲームのつづく街をゆく

森を抜け林を抜けて亡母に会う

太田 昭 大阪

こはらとしこ 福島

理由にはならぬと水滴が落ちる

抜け殻にまだ包まっているのです

西 恵美子 宮城

合田瑠美子 大阪

通せんぼばかりしてくる唐辛子

夫には悪いがコイビトも大事

籠島恵子 大阪

水品団石 静岡

誤字脱字あってズンドコ節が行く

家で呑むつい姐さんと妻を呼び

河津寅次郎 兵庫

北 れい子 宮城

蒼天に白い記憶が飛んでゆく

言いたけりやはつきり言っ竹落葉

河村啓子 京都

「川柳文学」ロキウム」
No.43 よし(つぎ)

山本洵一 東京

明日こそと思った明日がもう終る

西内朋月 大阪

焼きたてのパンより腫れた足の甲

岡谷 樹 奈良

その角を曲れば鳥になるつもり

平尾正人 鳥取

濡れている受け取る人のない手紙

赤松ますみ 大阪

難問をまたもグラスにそそがれて

よく生きた良く生きたねと泣いている
平尾正人
鳥取

受験日は心からいつてらっしゃい
毛利由美
茨城

火の用心我が家は寒い家庭です
水品団石
静岡

僕にかなふって淋しい日が続く
熊谷岳朗
岩手

電柱のように連なる組織です
渡邊理紗
千葉

三角をみんな集めて円にする
星井ごろう
新潟

海に出て指にからまるもの解く
西 恵美子
宮城

手を打つと悪事の花がぱつと咲く
熱田熊四郎
島根

遺産分け月の欠片で良いですか
北 れい子
宮城

ゼロファンの中でもがいている妬心
合田瑠美子
大阪

愛犬とわたしの影の弾む道
伊藤益男
千葉

一時の挫折百年咲くために
大石一粹
秋田

おだやかな運河におろす春の耳
小西カツエ
大阪

山内美代子 愛知

出来の良い秘書だ親分庇い切る

椅子に座ろう一旦負けたことにして

こはらとしこ 福島

新川弘子 大阪

半分は妻のおかげとほめられる

うつむいて真冬の汗を拭く男

山本洵一 東京

中前棋人 静岡

トイレまで追っかけてくるコマージュナル

ライバルを凌ぐ裏表紙の炎

中井アキ 大阪

夏井せいじ 新潟

そうかそうか妻はモナリザ目指してる

キリストとアラを混ぜたのが下剤

石橋芳山 島根

久恒邦子 京都

おぼろ月少女の脚も伸びました

春一番 雨戸二枚が不眠症

河村啓子 京都

中野六助 京都

記念樹を植えてあなたを忘れよう

明朗会計つまようじまで加算され

河津寅次郎 兵庫

三上博史 栃木

立たされて電柱らしい物思い

環境に悪い呼吸は止めなさい

南野耕平 埼玉

三村一子 大阪
一振りのタクトを待っている蕾

(故) 太田虚舟 富山
騙し絵をまだ見せられるマニフェスト

森下よりこ 和歌山
無節操なカラス嘘泣きが上手

早泉早人 大阪
楽園というしたたかな誘い水

桂 晶月 大阪
忘れたくないから一度だけにする

牧野芳光 鳥取
爺さんが死んだ桑畑も消えた

小川一子 大阪
夢の中ときどき笑う雪だるま

別所花梨 島根
ドリップコーヒ透かし切れないことがある

小川しんじ 大阪
難しい貌で詐欺師は詐欺をする

太田 昭 大阪
ロレックスも俺の時計も同じ二時

内田久枝 島根
握った手離すと醒めてくる言葉

山本トラ夫 静岡
咆えたてているが尻尾は振っている

望月 弘 静岡
躓いたところへ投げた石ひとつ

嶋澤喜八郎 大阪
仏には花を僕には現ナマを

「川柳文学」ロキウム
No.42 よし(つぎ)

痛点にワインたっぷり注がれる
籠島恵子 大阪

ほろ酔いで終わると飲んだ意味がない
井丸昌紀 大阪

十七歳悲喜交々の桃の花
宮前秀子 大阪

まず猫の頭を詰める旅支度
松原未湖 福井

外国語喋る男は犯罪者
西内朋月 大阪

うすじめり葉はさんでいた場所の
笹田かなえ 青森

神殿の周りも奥も霧ばかり
赤松ますみ 大阪

笹田かなえ

青森

大石一粹

秋田

黒い馬ずっと夜露が乾かない

取巻きの一人が風でブルータス

伊藤益男

千葉

水品団石

静岡

空回り落ち葉の旅をつづけおり

こはらとしこ

福島

リクエスト曲が涙で歌えない

合田瑠美子

大阪

迷惑だけど嬉しい同居夢

山内美代子

愛知

振り向くと影がふたつになっている

桂 晶月

大阪

軽いなあ修整ペンを持ち歩く

太田虚舟

富山

約束のとおりきれいにたたむ羽

熱田熊四郎

鳥根

DNA螺旋壊れるのも遺伝

牧野芳光

鳥取

くたびき伝説の縄の端と端

(熱田圭詩朗改め)

久恒邦子

京都

ペン先が飛行機雲を引いていく

メール消すすこし乾いた別れ方

小川しんじ

大阪

歯車になります犬が尻尾振る

「川柳文学」ロキウム
No.41 よろ（ごきり）

三上博史

栃木

中前棋人

静岡

ゴミ以外興味は持たぬ収集車

これ以上黒くなれないほどの黒

孝久美智子

福井

毛利由美

茨城

どんどやき目指して雪を踏みしめる

ゴミを両手に明けましておめでどう

熊谷岳朗

岩手

中野六助

京都

エンピツがころがる風があるんだね

諦めのわるい月夜を連れ歩く

石橋芳山

島根

平尾正人

鳥取

ストローを折り曲げ考えが違う

手を置いて確かめている春の位置

夏井せいじ

新潟

小西カツエ

大阪

失言も他言もしない犬を飼う

少しずつ夜に凭れていく背中

内田久枝

島根

望月 弘

静岡

笑い声残して閉じる自動ドア

父さんのトラを囲みに子らが来る

三村一子

大阪

星井ごろう

新潟

ジンジャーエール桃色吐息歌えない

何もかもみんな横書きシクラメン

許すのにこんなに歪む凹レンズ
中井アキ 大阪

柗の花よお前も無口だな
嶋澤喜八郎 大阪

堪忍袋じょうぶなヒモに替えました
河津寅次郎 兵庫

十年目に次の十年考える
早泉早人 大阪

荒れた手にハンドクリームぬる夜半
新川弘子 大阪

キムチ鍋底に潜んでいる本音
別所花梨 島根

本日の占い通り生きてみる
河村啓子 京都

激論の予感濃い目のお茶を飲む
山本トラ夫 静岡

箱だけが残って箱の中にいる
小川一子 大阪

なぞなぞがすんなり解ける三丁目
西 恵美子 宮城

無礼講と言われ控えた酒肴
太田 昭 大阪

許すのは簡単だけど許さない
井丸昌紀 大阪

かすみ草ブレぬ生き方考える
籠島恵子 大阪

欄干に蔦の絡まる電子音
北 れい子 宮城

「川柳文学」ロキウム」
No.41 よし(じじい)

南野耕平

埼玉

戯れに口先だけの嘘喧嘩

渡邊理紗

千葉

日だまりが眠る物干し竿の下

西内朋月

大阪

落ち込んだ人を支える皆仲間

山本洵一

東京

コンニャクの揺れ止まるまで皿洗う

宮前秀子

大阪

実の成る木 誰かのために植えておく

森下よりこ

和歌山

風止んで何か始まる月夜茸

赤松ますみ

大阪

ティンカー・ベルの話になっている小窓

森下よりこ

和歌山

空高し人にはひとの透明度

三上博史

栃木

赤まんま燃えてヒロイン立ち上がる

星井ごろう

新潟

病葉の穴から明日を見えています

合田瑠美子

大阪

かき混ぜた卵の渦は太郎の絵

望月 弘

静岡

嘘はすぐ溶けて舌先の泡沫

石橋芳山

島根

いろはから「ん」に進行する命

毛利由美

茨城

致死量に紐が一本足りません

松原未湖

福井

父親をあの人と言う反抗期

久恒邦子

京都

お前には夜泣きでずっと泣かされた

(圭詩朗改め)

熱田熊四郎

島根

猫の腹くにゆくにゆ間のびした時間

中前棋人

静岡

人の世の義理祝と書く仏と書く

大石一粹

秋田

入り口か出口か火葬場の扉

三村一子

大阪

芒原狐イメケン連れて来る

「川柳文学」ロキウム」 No.40 よろ (つぎ)

夏井せいじ 新潟
ストレスにんにく臭が従ってきた

笹田かなえ 青森

蛇の穴塞がれるときうすあかね

中野六助 京都

喝采を聴いていた北向きの窓

小川しんじ 大阪

泥沼で亀はいちにち詩をひねる

平尾正人 鳥取

絵になってしまふ反則気味の富士

中井アキ 大阪

マニフェスト踏んでしまった蟻の列

籠島恵子 大阪

コスモスの遠く遠くを見るまなこ

伊藤益男 千葉
プロポーズ一枚岩になりたくて

小西カツエ 大阪

ずぶ濡れてテトラポットと仲間たち

熊谷岳朗 岩手

生きているのか生かされているのか夕陽

山内美代子 愛知

殺生な舞い上がらせて取るハシゴ

桂 晶月 大阪

手に入れてみると寂しくなりました

太田虚舟 富山

自分史のここにも甘いエピソード

嶋澤喜八郎 大阪

追い越した影が私にそっくりだ

「川柳文学」ロキウム」 No.40 よし (つぎ)

早泉早人

大阪

牧野芳光

鳥取

心配をかけてる方がよく眠る

胸にまで飛び込む花火待っている

北 れい子

宮城

河津寅次郎

兵庫

熟れてから悩むガラスのり・ん・ご

陶器市妻はまとめて武器仕込む

内田久枝

島根

水品団石

静岡

潜り込むしばらく出ない美術館

かけられぬ電話が電話帳にある

井丸昌紀

大阪

新川弘子

大阪

歳月のすき間うっかり踏み外す

ストレスがたまり爆発しそうです

小川一子

大阪

南野耕平

埼玉

欠伸して午後のしあわせ噛みしめる

本当におんなじ空を見ていたの

太田 昭

大阪

西 恵美子

宮城

言い勝って寡黙な影と向かい合う

パタンパタンと窓閉めながら魚になる

別所花梨

島根

西内朋月

大阪

化粧室こんな私の紅を塗る

名優のアドリブあの世から届く

「川柳文学」ロキウム
No.40 よろ（つぎ）

こはらとしこ 福島

まごころをポーンと蹴った青い空

宮前秀子 大阪

空弁を手に空港を小半日

渡邊理紗 千葉

縄跳びを送電線でする夕日

山本洵一 東京

積み上げた本の背中に睨まれる

山本トラ夫 静岡

木枯らしやアバラの下は病んでいる

河村啓子 京都

たいていは呟くだけのブロッコリー

赤松ますみ 大阪

ちちんぷいぷい缶コーヒーのプルトップ

河村啓子

京都

赤富士を見ようと岬まで誘う

熱田圭詩朗

島根

こそあどのおぼつかぬまま秋口へ

松原未湖

福井

飛び越えるたびにヒールが脱げていく

西 恵美子

宮城

末席の蝶々だけが飛んでいる

三村一子

大阪

眠れない人も乗ってる終電車

山本トラ夫

静岡

溜め息をふきかけ紅茶苦くする

太田 昭

大阪

浴槽の蓋はいつでも日陰者

三上博史

栃木

十四五本の鶏頭数え子規思う

北 れい子

宮城

橋の下流されていた秘密基地

山内美代子

愛知

芙蓉散る五臓六腑を嚙る音

夏井せいじ

新潟

長い雨 追ってお返事いたします

笹田かなえ

青森

福耳のただそれだけに酔うている

早泉早人

大阪

何か言いたそうな棚田に曼珠沙華

星井ごろう 新潟

恋人がまだ見つからぬ古本屋

中井アキ 大阪

海鳴りが好きで指切りしてしまう

久恒邦子 京都

空蟬にしがみつかれている腕

北田ただよし 大阪

祭祀者が消え透明になる墓標

大石一粹 秋田

不意に来る雨で男の役所

河津寅次郎 兵庫

演歌好きの坊主の経の節回し

望月 弘 静岡

予想屋の赤エンピツを借りてみる

合田瑠美子 大阪

朝顔のうす桃色に母がいる

中前棋人 静岡

九条が生まれたことを忘れない

中野六助 京都

手をつなぐ鉄道草の辺りまで

別所花梨 島根

しなやかに踊る仏事を終えました

毛利由美 茨城

もういくつでも構わない誕生日

嶋澤喜八郎 大阪

墓の表に戻って見たが

小西カツエ 大阪

母と見たあめ色の月母思う

あのかたをなぞると突き刺さる小骨
平尾正人 鳥取

大人ぶって母に初めて背いた日
井丸昌紀 大阪

捻挫して斜めにせまる秋の色
小川一子 大阪

ふるさとの太鼓だんだん小さくなる
籠島恵子 大阪

正論に裏ある如し昼の月
伊藤益男 千葉

妹は明るい方にグレていた
森下よりこ 和歌山

限界はあるな茶碗も底がある
熊谷岳朗 岩手

ささやけば風もささやく無人駅
新川弘子 大阪

季が替わる新保護色を買いにゆく
太田虚舟 富山

方言で口説かれたからついてきた
谷口さとみ 静岡

金曜の夜はファンファーレが響く
石橋芳山 島根

午後三時からの銀行何してる
小川しんじ 大阪

子を放すよう青柿の実が落ちる
牧野芳光 鳥取

着地点探して鳥になった種
内田久枝 島根

「川柳文学」ロキウム」
No.39 よりの(つぎ)

南野耕平

埼玉

桂 晶月

大阪

持たされたナイフが妙に手になじむ

ゴールドの靴で登ってゆく梯子

山本洵一

東京

赤松ますみ

大阪

それほどに飲むわけがあったか酔っ払い

多色刷りされてしまった身上書

こはらしこ

福島

申し訳ないとだんごを皆食べる

渡邊理紗

千葉

秋空の瞳瞬く異邦人

宮前秀子

大阪

聞いていますか 骨壺を揺する

西内朋月

大阪

木犀の匂う深夜の鍵の穴

水品団石

静岡

一抜けた後にぞろぞろついて来る

桂 晶月 大阪

正論がたすき掛けしてやって来た

星井ごろう 新潟

ごめんねと部屋横切ってゆく空気

久恒邦子 京都

夕焼けを待っている真っ白な画布

中井アキ 大阪

誉められて子供がひとりふえました

中前棋人 静岡

南野耕平 埼玉

いやいやをしながら寄ってくる金魚

過去形で話し始める食器棚

内田久枝 島根

三上博史 栃木

胸底に象の足跡だけ残る

竹箒地面も痒いところがある

夏井せいじ 新潟

大石一粹 秋田

減塩のはなしパピプペポと続く

身の上を語れば眉に出る愁訴

河村啓子 京都

森下よりこ 和歌山

待つという優しさ木槿咲きました

かぼちゃごろごろ楽しみがいっぱい

望月 弘 静岡

温暖化ひしひしと紙吹雪

熊谷岳朗

岩手

山内美代子

愛知

迷いまた抱えてしまう右の耳

一メートル一億円のアホ道路

別所花梨

島根

北田ただよし

大阪

放心の果てに動いた花時計

四角張る心諫めている鮑

早泉早人

大阪

笹田かなえ

青森

ウイスキー注いで雨音聞くひとり

闇に追うとうに失くしたはずの音

毛利由美

茨城

嶋澤喜八郎

大阪

結婚後画数悪い名に変わり

ちっぽけな無題ゴーヤがぶらさがる

河津寅次郎

兵庫

谷口さとみ

静岡

万策が尽きて孤独な太郎冠者

階段を拭き終える頃笑えそう

三村一子

大阪

石橋芳山

島根

勝ち組も負け組もいるうりのつる

閉塞の森へと首切りが進む

中野六助

京都

合田瑠美子

大阪

冒険ごっこへビに遇うヒトに遭う

地ビールの泡を飲み干すひとり旅

熱田圭詩朗

島根

太田虚舟

富山

切れ味はともかく握っているペン

耳搔きが探るノイズのうらおもて

西 恵美子

宮城

籠島恵子

大阪

鶉色の小函にしまっておきました

致死量を知っているのはかすみ草

山本トラ夫

静岡

伊藤益男

千葉

腰痛になって仲間にしてもらう

参加者に名前は載っているわたし

水品団石

静岡

井丸昌紀

大阪

ボクだけの看護婦さんじゃありません

嘘付けぬ男信用できません

平尾正人

鳥取

新川弘子

大阪

少し嘘交えて夢はよく伸びる

月旅行夢みて貯めるワンコイン

小西カツエ

大阪

小川一子

大阪

それではと怪にならないうちに寝る

甘えてもいいとささやく豆の蔓

小川しんじ

大阪

北 れい子

宮城

寝返りのたびに雑念増えてくる

巾着に詰めてあるソバ一杯半

「川柳文学」ロキウム
No.38 よりの(つぎ)

こはらとしこ 福島
老人のまち青空が澄んでいる

みずうみの底は予言に満ちている
赤松ますみ 大阪

牧野芳光 鳥取
日々好き日男の芯が脆くなる

渡邊理紗 千葉
とりあえず買い物かごにほうる夢

山本洵一 東京
あの頃のことばは言葉にできんなあ

宮前秀子 大阪
ほっとする父の何でもない話

西内朋月 大阪
煩惱とバトルしている瘠せ蛙

太田 昭 大阪
無駄話横一列で伸して来る

太田 昭

大阪

弥陀の手の大きく見えて来る余命

とび魚に言われたように飛んでみる

鳴澤喜八郎

大阪

小西カツエ

大阪

くるい咲くつつじの横にまたつつじ

つながれた鎖が夕陽浴びている

別所花梨

島根

三村一子

大阪

指先の冷たい人と手をつなぐ

ねぎぼうず折れてきのうを謝罪する

北田ただよし

大阪

伊藤益男

千葉

水際に生命線を置いている

輝いている間に呼吸器を外す

平尾正人

鳥取

熱田圭詩朗

島根

皇帝ペンギンになった日曜日

ときどきは遊ぼパンダのぬいぐるみ

星井ごろう

新潟

合田瑠美子

大阪

目が癒えて一気に下る雪解水

何食って生きているのか駅の鳩

小川しんじ

大阪

水品団石

静岡

パソコンの向こう側にも人がいる

「川柳文学」ロキウム
No.37 よろ (つぎ)

笹田かなえ 青森
いのちの音いのちに届く立ち止まる

山本トラ夫 静岡
待たされたうえに踏み絵も置いてある

中井アキ 大阪
青白い炎体を突き抜ける

大石一粹 秋田
葉桜のあたりで愛は平熱に

桂 晶月 大阪
にわか雨ただ側にいて欲しかった

石橋芳山 島根
完結でしようか海は切り取り線

久恒邦子 京都
フライパン叩いて起す花木立

渡邊理紗 千葉
風鈴が冷やし中華の文字を追う

河津寅次郎 兵庫
晩学のカバンに眠るソクラテス

北 れい子 宮城
生命線明日に伸びると信じてる

牧野芳光 鳥取
酒飲んでやっと出てくる向こう傷

毛利由美 茨城
血液型で分かったような顔をされ

三上博史 栃木
菜の花畑時間に溶けていく時間

河村啓子 大阪
鉤括弧一人でそっと閉じました

「川柳文学」ロキウム
No.37 よしの(しんせ)

谷口さとみ 静岡

今晚は笑い上戸と呑みたいな

早泉早人 大阪

ビタミンが抜け出るような絵画展

中野六助 京都

発芽するほうへと置きかえる言葉

山内美代子 愛知

根切虫水責めにする二日間

望月 弘 静岡

現場から中継します今の僕

籠島恵子 大阪

不器用に生きる迷惑かけながら

森下よりこ 和歌山

逃げて来た場所で見事に咲いている

南野耕平 埼玉

悪いけど今は天使じゃないんです

中前棋人 静岡

引力を振り切っている青蛙

小川一子 大阪

神経のところどころで花ざかり

夏井せいじ 新潟

老春にビビンバ入れてかき混ぜる

新川弘子 大阪

座布団に温もりがある無人駅

熊谷岳朗 岩手

快食快便とても素直な足の先

井丸昌紀 大阪

起きてから寝るまでテレビ見てました

「川柳文学」ロキウム
No.37 よりの(つぎ)

西 恵美子 宮城

森羅万象ときどき迷い込む街

ドクダミの前でお祈りしてしまう

赤松ますみ 大阪

西内朋月 大阪

裏鬼門に可憐に咲いた海老根蘭

太田虚舟 富山

そろそろと言われ二年を生き延びる

こはらしこ 福島

母元氣そういうことで良しとする

山本洵一 東京

つまずいた途端に揺らぐ小宇宙

宮前秀子 大阪

思うても詮無いことをまだ思う

内田久枝 島根

孤独だけ座って欲しい木のベンチ

内田久枝

島根

北 れい子

宮城

水たまり思い通りに動く空

新緑を抜ければ脈を打つ臓器

星井ごろう

新潟

河津寅次郎

兵庫

糸切って風船空へおつかいに

海賊の海へ騎馬合戦に行く

井丸昌紀

大阪

久恒邦子

京都

春の宵書き出してみる母の恩

散りぎわに嫌味たっぷり言う椿

平尾正人

鳥取

松原未湖

福井

不思議だと誰も言わないのが不思議

泥足の言い訳をする春の猫

小川しんじ

大阪

三上博史

栃木

人間が恐い無傷のお月さん

さつま芋性格美人だと思う

笹田かなえ

青森

山本洵一

東京

幾つかの雪に別れて雪に逢う

赤信号向かいのバスが動き出す

望月 弘

静岡

熊さんと八つつあんがいる消費税

「川柳文学」ロキウム
No.36 よし (つぎ)

水品団石 静岡

変人は良いが変態では困る

別所花梨 島根

極限の白で咲きたい梅の花

夏井せいじ 新潟

忠告にニンニク臭が従ってきた

嶋澤喜八郎 大阪

両の手を頭にだるまさんごっこ

桂 晶月 (晶月改め) 大阪

受け入れてから柔らかな影になる

小川一子 大阪

雨やんで演歌で終る君が好き

小西カツエ 大阪

ゆきずりのごとさくらさくらと追いかける

早泉早人 大阪

腹へっていたあたたかい家だった

山内美代子 愛知

一日の始まり猫のポーズから

太田虚舟 富山

夢売りがぶつつり来なくなる病舎

北田ただよし 大阪

お猿とはきのう分かれたばかりなり

中井アキ 大阪

シングルライフ強かにしなやかに

森下よりこ 和歌山

偵察を重ね用心深いめじろ

熊谷岳朗 岩手

もう一度言おうワタシは鬼である

山本トラ夫 静岡
例えばの話が分かりにくくする

熱田圭詩朗 島根
僕の名もエンドロールで流れてゆく

中野六助 京都
アンニユイに春の卵を掻き混ぜる

太田 昭 大阪
擬餌針に触れたいときもある孤独

三村一子 大阪
告白をいちご潰してきいている

新川弘子 大阪
本当は目立ちたがりやかすみ草

石橋芳山 島根
さあさあと迫られ首を置いてきた

籠島恵子 大阪
真相はもやっときせておきましょう

牧野芳光 鳥取
幸せな時は電話をかけてこぬ

南野耕平 埼玉
僕は君だったりします触れてみて

西内朋月 大阪
貸した金返ってこない寒い酒

合田瑠美子 大阪
最終の連絡船が出て行った

伊藤益男 千葉
然りげなく会って別れただけなのに

谷口さとみ 静岡
遠まわりしたくてスニーカー結ぶ

へんだなと思って握り返した手

中前棋人

静岡

行進曲に乗って魔物がやってくる

赤松ますみ

大阪

かさぶたを揺らすと落ちてくる明日

西 恵美子

宮城

同じ思いで 海を見ている

宮前秀子

大阪

満月を透かして届きますか愛

こはらとしこ

福島

打楽器のひとつになってゆく敵意

大石一粹

秋田

じゃんけんぽん何度も愛を確かめる

河村啓子

大阪

お布団を軽く濡らして去った雨

毛利由美

茨城

毛利由美

茨城

夏井せいじ

新潟

紙コップ飛ばないようにお茶入れる

色鉛筆でお粥きれいに描いてみる

松原未湖

福井

内田久枝

島根

牡丹雪おまえも母になりたいか

背と背と背春になったら笑わせる

望月 弘

静岡

太田虚舟

富山

少子化の国少子化のマグロ食う

鬼アザミあなたの思慕が重くある

嶋澤喜八郎

大阪

小西カツエ

大阪

大きくさめして静寂を深くする

どうぞどうぞと鳥を通した後がある

谷口さとみ

静岡

中前棋人

静岡

ブルーじゃなくて空が欲しいと言ったのに

あれはだめこれはだめだと壘の蓋

熊谷岳朗

岩手

星井ごろう

新潟

サクラ咲きついに抱かれてしまうなり

水玉と月がいつしよに昇ります

三村一子

大阪

カーテンの襞に野心を潜ませる

晶月

大阪

熱田圭詩朗

島根

沈まないように言葉を紡ぐ夜

ともづなで三者面談する親子

井丸昌紀

大阪

中野六助

京都

脇道と知らずひたすら突っ走る

はしやぎ過ぎだろう人体解剖図

森下よりこ

和歌山

石橋芳山

島根

もしもなんて揺れる心を濡らす雨

丸めたら飲み込めそうな象にカバ

別所花梨

島根

山内美代子

愛知

ぐらついた事が一度はある柱

絵に描いた餅だ安心活力は

大石一粹

秋田

水品団石

静岡

西高東低 北の情話が縮こまる

ラストナイト傷跡を又深くする

久恒邦子

京都

合田瑠美子

大阪

やわらかい消しゴムになるお正月

蓋付きのバケツの中が姦しい

笹田かなえ

青森

河津寅次郎

兵庫

くらがりを続ける百合の香る部屋

もがくより祈りなさいと流れ星

泥ですが栄養分はたんどある
早泉早人 大阪

北 れい子 宮城

脱皮するたび喪服一枚増えてゆく

伊藤益男 千葉

ピリオドを打ちたいときもある余白

籠島恵子 大阪

息切れに気付いてほしいかすみ草

牧野芳光 鳥取

不況だと思えば不況かも知れぬ

孝久美智子 福井

弱視にも山茶花の赤あったかい

西 恵美子 宮城

森へ行って復習をするおまじない

許された数だけ皺が深くなる
中井アキ 大阪

小川しんじ 大阪

薬飲むこの敗北感は何んや

小川一子 大阪

火傷せし愛は確かな道をゆく

三上博史 栃木

平均寿命それも一つの山である

太田 昭 大阪

恍惚の猫がわが家を離れない

宮前秀子 大阪

日に三度さあ召し上がれ肩がこる

南野耕平 埼玉

この雨をくぐれば明日が来るだろう

「川柳文学コロキウム」
No.35 よりの(つぎ)

北田ただよし 大阪

コロの額縁 昼行灯のルミナリエ

平尾正人 鳥取

アルバムの中に太陽だった人

渡邊理紗 千葉

やりたいを増やす2月の予定表

西内朋月 兵庫

白旗をさきに揚げてるから平和

山本洵一 東京

灯を消して眠る 死とはそんなものか

山本トラ夫 静岡

失恋に親ゆび暇を持て余す

赤松ますみ 大阪

中心へ暖色系で攻めてゆく

山本トラ夫
静岡

迂回路で静かに春を待っている

北田ただよし
大阪

西 恵美子
宮城

逢えるまで蒸留水のままでいる

毛利由美
茨城

中野六助
京都

駅名のない駅と傘のない僕と

熱田圭詩朗
島根

小西カツエ
大阪

くつろいでころぶところに海がある

久恒邦子
京都

牧野芳光
鳥取

どの岸に辿り着こうと鶴は鶴

水品団石
静岡

北 れい子
宮城

女の首真綿で締める鍵の束

森下よりこ
和歌山

石橋芳山
島根

石投げてみようホーキンスの宇宙

さつま芋器量好しから売れてゆく

南野耕平 埼玉

ご近所で一番怪しいのは君か

大石一粹 秋田

国歌斉唱みんな金魚の口になる

別所花梨 島根

心のひだをマイクがとても良く拾う

籠島恵子 大阪

痛みに触れてきたのは語尾だった

河津寅次郎 兵庫

赤い羽根似非篤志家になります

太田虚舟 富山

ダリの絵と一緒に朽ちる花ざくろ

小川しんじ 大阪

輪廻転生今の私はラッキーか

嶋澤喜八郎 大阪

どんぶらこスイカが川をさかのぼる

中井アキ 大阪

シナリオの先に踏絵がひとつある

孝久美智子 福井

生きてるか尋ねてくれる弟よ

伊藤益男 千葉

やむを得ぬ選択もある薬漬け

三上博史 栃木

墓場まで道連れをする Windows

合田瑠美子 大阪

シャカシャカと今朝の玉子がよく喋る

山内美代子 愛知

落丁のページよけいに見たくなる

熊谷岳朗 岩手
何も出来ないが男で生きている

三村一子 大阪

枷はずれとたんにくしゃみ一つ出る

夏井せいじ 新潟

お手本にもならぬ大人になり下がる

晶月 大阪

ゴスペルを歌って縊る免罪符

望月 弘 静岡

記憶あるうちは故郷出ぬ覚悟

渡邊理紗 千葉

太陽がバカンスに行く冬の空

早泉早人 大阪

メガネ外せば心許無い顔になる

内田久枝 島根

目を閉じて山の動きを聞いている

中前棋人 静岡

囲碁将棋静止画像に魅せられる

小川一子 大阪

同じ日に二度つまずいた光る石

井丸昌紀 大阪

街の灯が余りにきれいだったから

太田 昭 大阪

はひふへほ作り笑いも骨が折れ

谷口さとみ 静岡

健康なままの老後に金はない

平尾正人 鳥取

誰一人読めぬカルテの誤字脱字

「川柳文学」ロキウム
No.34
よりの(つぎ)

宮前秀子

大阪

久し振り老いを確かめあっただけ

西内朋月

兵庫

女運悪くて飲んでばかりいる

山本洵一

東京

まっすぐに歩いているつもりなのだが

笹田かなえ

青森

誰でも誰に私はいないでしょう

星井ごろう

新潟

目ざわりなわたくし影になりました

赤松ますみ

大阪

つらそうなどころにつけるアップリケ

星井ごろう
新潟

ひまわりの丸さおせわになりました

永藤弥平
大阪

レオタード空中ブランコするためだ

森下よりこ
和歌山

残暑お見舞い「篤姫」二回見ています

水品団石
静岡

クーラーの効き過ぎサリーちゃんの足

牧野芳光
鳥取

桃色と金に染まった脳味噌だ

晶月
大阪

満月がゆるりと招く千年紀

山内美代子
愛知

奥の手をすこうし見せて引き止める

望月 弘
静岡

トンネルで核廃絶を聞いている

久恒邦子
京都

シーソーのガシツと止まる現在地

内田久枝
島根

言い逃ればかりしているダンゴ虫

山本トラ夫
静岡

バンザイは二枚舌ですあしからず

河津寅次郎
兵庫

盲導犬について会釈した交差点

三村一子
大阪

生きている小さなあぶく出しながら

懺悔抄勢い余る滝の音
北 れい子 宮城

足が地を掴んでいない病み上がり
伊藤益男 千葉

プロローグ蝶になろうか蜘蛛になろうか
西 恵美子 宮城

雨ごんご独り芝居のあとさき
大石一粹 秋田

ひとときを薔薇になりきるバラの花
別所花梨 島根

山のまた向こうも山の先は空
毛利由美 茨城

本流を溢れてネットカフェの水
石橋芳山 島根

このへんで火を入れておく夫婦仲
あらいじゅんこ 長野

どぶ川が肯定したい泣きどころ
渡邊理紗 千葉

ドアノブに勇気をもらおう検診日
合田瑠美子 大阪

秋と向き合い浮かび出てくる watashi
三上博史 栃木

席蹴った男はやはり振り返る
太田 昭 大阪

ご多分に漏れずナイフを光らせる
中野六助 京都

生みたての息は命の白いする
早泉早人 大阪

谷口さとみ 静岡
特売に秋刀魚うっかり二匹買う

南野耕平 埼玉
青空の青さは何のメッセージ？

籠島恵子 大阪
折り返し地点だあれも追い抜かぬ

鳴澤喜八郎 大阪
行く末が不安さつさと滝になる

西内朋月 兵庫
嘘ちよっと ええ格好をした疲れ

笹田かなえ 青森
桃色の金平糖のないしよだよ

熱田圭詩朗 島根
百景に入らないけど素敵だよ

中井アキ 大阪
それからを尋ねてくれる人がいる

夏井せいじ 新潟
採尿カップコネなどなにもありません

太田虚舟 富山
鳩尾の辺り包丁の試し切り

小西カツエ 大阪
川わたる風をあつめて宵になる

小川一子 大阪
ずり落ちる眼鏡あしたがよく見える

山本洵一 東京
私を飲んでとウイंकするワイン

中前棋人 静岡
人間がいやになったら石になる

「川柳文学」ロキウム
No.33 よりの(つぎ)

松原未湖 福井

一本のナイフ余震の中にある

井丸昌紀 大阪

リセットを押しても僕は僕のまま

小川しんじ 大阪

試されてるのか聖書は読みづらい

宮前秀子 大阪

マンションを上目使いに鬼瓦

平尾正人 鳥取

ドラマではここで家族の泣く場面

熊谷岳朗 岩手

ボールペン字が下手だなといつも言う

赤松ますみ 大阪

見上げれば保護者のように天井画

熊谷岳朗 岩手

播本充子 東京

ひとりだちできそうナイフという光

アンテナに氷の花が咲きました

中野六助 京都

大石一粹 秋田

この鳩の群れにもラスコーリニコフ

肩書きと言えげ亡父の喪主ぐらい

夏井せいじ 新潟

別所花梨 島根

紫が好き無防備な顔になる

誕生秘話深い眠りの中でめくる

熱田圭詩朗 島根

松原未湖 福井

甘鯛の美味しい海になりました

夕焼けを浴びた形で眠る猫

星井ごろう 新潟

久恒邦子 京都

たいくつなバケツに水を入れてやる

ゆるゆるの輪ゴムで締めている倫理

北田ただよし 大阪

嶋澤喜八郎 大阪

鳥だって飛べないままで暮したい

つき合いで揺れる地震もあるだろう

毛利由美 茨城

後期高齢束ねて甘く見るでない
森下よりこ 和歌山

提灯もプラスチックになっていた
山内美代子 愛知

本気ではないと分かってからの鼻
南野耕平 埼玉

にんげんが怖くて海の底にいる
中前棋人 静岡

手をつなぐ心もつなぐはずだった
晶月 大阪

花をよく見ないで花のことを言う
山本トラ夫 静岡

ジタバタとしたいし静かにもしたい
平尾正人 鳥取

泣きたいと思う 涙が出てこない
あらいじゅんこ 長野

解凍魚まわりは知らぬ者ばかり
内田久枝 島根

おだやかに暮らしていても肩はこる
早泉早人 大阪

粹がっているな女の前だから
水品団石 静岡

後日談書けばかすれるボールペン
合田瑠美子 大阪

谷底に落としたエンゲージリング
北 れい子 宮城

どうすればいいのか人形の眠り
石橋芳山 島根

「川柳文学」ロキウム
No.32 よしの(つぎ)

太田虚舟 富山

ここだけの話をみんな知っている

牧野芳光 鳥取

沈みそうな舟だが沈むまでは舟

谷口さとみ 静岡

ブランコは揺れる独りでも揺れる

太田 昭 大阪

砂時計三分間の秘話を聞く

小川しんじ 大阪

滅亡の鍵をしっかりと握る雨

中井アキ 大阪

ギブスの中で逆転劇の策を練る

籠島恵子 大阪

沈黙へ水の音だけ冴えている

井丸昌紀 大阪

野心秘め右に傾くやじろべえ

伊藤益男 千葉

いちにちが霞のように過ぎてゆく

望月 弘 静岡

ニュートラルにして新聞読んでいる

西尾のどか 大阪

ひとときの心やすめる花の寺

小川一子 大阪

等身で映って街は忙しい

小西カツエ 大阪

逆さまに置いて帽子に叱られる

三上博史 栃木

気温三〇度衝動へ引火する

「川柳文学」ロキウム
No.32 よし (つぎ)

河津寅次郎 兵庫

シャーペンのノックで合図交わす仲

美しい曲がり具合になっている

赤松ますみ

大阪

西内朋月 兵庫

焼酎をステテコで飲む夏が好き

宮前秀子 大阪

留守電に聞かせておいて昼寝する

笹田かなえ 青森

約束の窓の細かな雨の粒

山本洵一 東京

雨が降る団地墓場のように見え

西 恵美子 宮城

今日もまたお行儀のいいメロンパン

三村一子 大阪

夜間飛行ねぐら忘れた赤い鳥

三村一子
大阪

笑わせて笑ってひとり座を下りる

大切なところで昼寝してしまう

牧野芳光
鳥取

中前棋人
静岡

ちゃんねるをひねるとみのもんたがでる

中間色残り時間を塗りつぶす

内田久枝
島根

笹田かなえ
青森

聖五月 男の鼓動つつがなく

残るのは食欲のみとなりました

伊藤益男
千葉

嶋澤喜八郎
大阪

どこまでも万葉仮名と二人連れ

本当のさよならなので握手する

毛利由美
茨城

三上博史
栃木

気圧配置ゆるりと生きている空気が

はぐれ雲昨日私はなに食べた

河津寅次郎
兵庫

松原未湖
福井

断面図なまがへばりついている

一日を占うバラの香水で

別所花梨
島根

南野耕平
埼玉

戻れない否戻らない場所がある

中野六助 京都

ふたつ三つ伏字のあった私小説

西内朋月 兵庫

デパ地下のおかず探して日が暮れる

森下よりこ 和歌山

あらいじゅんこ 長野

青空へ花を掲げる桐の花

晩学も楷書ばかりじゃ肩が凝る

神野宇乃子 大阪

太田虚舟 富山

禍と福のねじれた飴を舐めている

へらへらと笑うイラクの白い骨

石橋芳山 島根

中井アキ 大阪

いつだったピーターパンを辞めたのは

眷属に恵まれ掟から掟

谷口さとみ 静岡

西 恵美子 宮城

いなくてももしっかり描いてあるメダカ

蛍光色に囲まれ痛み究極に

北田ただよし 大阪

小川しんじ 大阪

学名は Homo Sapiens ひと種類

釣れた鰻おまえ短気なやつちやなあ

合田瑠美子 大阪

播本充子 東京

哲学の道で拾った羅針

きよしからジェロへ熟女がたわいない

ねじれると犬も食わない民主主義

望月 弘

静岡

山動く靴音軽く翔んでいる

北 れい子

宮城

もう一回もう一回とすべり台

籠島恵子

大阪

ご苦労と言ってやりたい桜散る

永藤弥平

大阪

黙々とそばをぱくつく孤独感

早泉早人

大阪

野火走る 少年の目が大人びる

宮前秀子

大阪

無党派の帽子を風が来て撫でる

大石一粹

秋田

最初から奢りと言って欲しかった

山本トラ夫

静岡

それぞれの旅を誘ってエアポート

西尾のどか

大阪

抜け道はどこかにあると六法書

山内美代子

愛知

眼に宿る 星座デザインしておこう

熱田圭詩朗

島根

穏やかな人と思われ春の鬱

井丸昌紀

大阪

スタートライン横目同士で目が合った

水品団石

静岡

青いビンわたしの知らぬ街がある

小西カツエ

大阪

「川柳文学」ロキユウム
No.31 よしの(つぎ)

松本幸夫 福島

唐辛子きらめくこともある話

アンニユイ とつぶやくヒロインの鏡

赤松ますみ 大阪

熊谷岳朗 岩手

孤独だから私笑っているのです

山本洵一 東京

手の先の煙草のふるえ止まらない

太田 昭 大阪

棺桶の使い勝手を聞いてみる

渡邊理紗 千葉

紫陽花を砂漠に咲かす甘い夢

小川一子 大阪

美しや逢うべき人と墓の色

久恒邦子 京都

蹴躓くこの石きつと君だろ

久恒邦子
京都

洗面器椿浮かべて三回忌

モニター上ではあなたは死んでいる

平尾正人
鳥取

北田ただよし
大阪

夕やけにトランプペットが鳴りやまず

やさしいと言われ牽制されている

中前棋人
静岡

熊谷岳朗
岩手

幸せなことに私に影がある

わからずやばかりで地球揉めている

望月 弘
静岡

中井アキ
大阪

茜ぐも誰かを愛し始めたね

リバーシブル私はどっちなのだろう

石橋芳山
島根

小川しんじ
大阪

殻つつくな雛よこの世は地獄だよ

特別と言われて有頂天になる

あいざわひろみ
長野

播本充子
東京

風水に凝るパンジーの黄黄黄黄黄

腕組みをしてやり過ぎす水曜日

南野耕平
埼玉

森下よりこ
和歌山

そんな所で笑ってないで鎌の月

「川柳文学」ロキウム
No.30 よし (つぎ)

三村一子 大阪

つば広の帽子一日魔女になる

牧野芳光 鳥取

猿だった頃の話はよくわかる

三上博史 栃木

春爛漫足の裏から来るエロス

松原未湖 福井

隣室は人語を話す鳥である

籠島恵子 大阪

こころざし半ばの物が押し入れに

北れい子 宮城

やんわりとくもりガラスのひとりごと

太田虚舟 富山

熱爛が旨い 浄土へいけません

山本トラ夫 静岡

目に青葉心の憂さはたんとある

内田久枝 島根

価値観の違う海から長い手紙

合田瑠美子 大阪

悩むほど優しくなつてゆく夕陽

水品団石 静岡

納戸には宇宙へ続く穴がある

毛利由美 茨城

私はいくつ年齢早見表

早泉早人 大阪

片想いに終わった恋も生きる糧

神野宇乃子 大阪

削除キー押して卒業出来ました

熱田圭詩朗 島根

納豆にぐるぐる巻きにされている

重いコート脱いで深海より浮上

西尾のどか 大阪

孝久美智子 福井

国民を忘れ国会もめている

パンパンに張っているけど僕の膝

井丸昌紀 大阪

松本幸夫 福島

木の芽どき皆確かめてみるこの世

忘却と書いてしまえば来るしじま

大石一粹 秋田

別所花梨 島根

みんなあなたにあげると言った鍵の束

反省のドアを閉めたり開いたり

小西カツエ 大阪

河津寅次郎 兵庫

修羅ひとつ躲して春を追いかける

補聴器に内緒話を盗まれる

太田 昭 大阪

渡邊理紗 千葉

夕焼けに帰る家などないからす

通話料タダでも相手おりません

山内美代子 愛知

永藤弥平 大阪

花灯路造花の桜だけの道

逝く時はつくり笑いをするつもり

嶋澤喜八郎 大阪

「川柳文学」ロキウム
No.30 よしの(しんせき)

谷口さとみ 静岡

しまい湯をつかい私はシンデレラ

あのあれで女優の名前出て来ない

西内朋月 兵庫

伊藤益男 千葉

読み掛けの本読み掛けのままにあり

霧吹きに虹をいっぱい詰めておく

西 恵美子 宮城

小川一子 大阪

ひと枝の蠟梅壺に喪中なり

らくがきに手頃な顔を提げている

中野六助 京都

笹田かなえ 青森

ひざこぞうもねずみこぞうも夜が好き

繭吐いたあとが大きな穴になる

赤松ますみ 大阪

宮前秀子 大阪

いい時代でしたね父の肩車

山本洵一 東京

急かされて並ぶどうでもいい写真

あらいじゅんこ 長野

形見着てつくづく思う親不孝

中野六助
京都

ごく稀にアインシュタイン的狂気

一杯に詰まった籠に用は無い

井丸昌紀
大阪

石橋芳山
島根

問題視されてるシマウマのシマだ

お賽銭チャリンと神の生返事

大石一粹
秋田

渡邊理紗
千葉

自立とは無糖紅茶の味がする

静電気誰かと誰か恋してる

北れい子
宮城

河津寅次郎
兵庫

前頭葉だけが限界認めない

今放つ雛に香りをつけておく

松原未湖
福井

三上博史
栃木

啓蟄にヒト科は人を恨み出す

5問目で諦めたのは俺だけか

南野耕平
埼玉

小西カツエ
大阪

アネモネがごあます言葉身につける

冬至の陽だまり熔けだす南回歸線

北田ただよし
大阪

内田久枝
島根

隠れ家の一つで空を食べている

森下よりこ 和歌山

高見盛を見たくて畑から帰る

ひとりつつく鍋などうまいもんですか

小川しんじ 大阪

平尾正人 鳥取

夕焼けを掴んでたぐり寄せる闇

神さまの休日にふる真っ赤な実

笹田かなえ 青森

永藤弥平 大阪

もう齢だ東海林太郎がすきだった

同行の影は妖怪かも知れぬ

早泉早人 大阪

合田瑠美子 大阪

擦れ違う風にウインクしてしまう

きのうより少しは伸びたなと思う

中前棋人 静岡

牧野芳光 鳥取

脳みそが味噌になるまで考える

笑ってる方から風は吹いてくる

あいざわひろみ 長野

山本トラ夫 静岡

絵手紙の絵に解説が付いている

襷ひとつ一つに埋めてある微罪

太田虚舟 富山

毛利由美 茨城

念のためかさぶたに貼るカットバン

髪染めて芝居の続き演じます

中井アキ 大阪

「川柳文学」ロキウム
No.29 よろ（ごきり）

久恒邦子 京都

バーコードに入れる女のあれやこれ

山本洵一 東京

この科白用意していなかったのに

鳴澤喜八郎 大阪

句読点打ちていねいに眠ります

太田 昭 大阪

戦争と政治のせいにして眠る

播本充子 東京

犬顔の司会者 私見ばかり述べ

伊藤益男 千葉

めし茶碗一粒たりと残さない

水品団石 静岡

お宝を最終処分場で見た

松本幸夫 福島

膝枕ほんのり夢の中に居る

小川一子 大阪

笑顔だけくれるあなたは卑怯者

山内美代子 愛知

コーヒーの香りのしない喫茶店

熱田圭詩朗 島根

前輪でひかれ 後輪でもひかれ

三村一子 大阪

苛立ちをふふふふつと豆腐鍋

谷口さとみ 静岡

みじん切りしたら笑いそうねパセリ

籠島恵子 大阪

老いてゆく放物線にそいながら

「川柳文学」ロキウム
No.29 よしの(つぎ)

望月 弘 静岡

二番手にいると俯瞰の目になれる

宮前秀子 大阪

こだわりは捨てて即席めんにする

熊谷岳朗 岩手

寒いから冬の話で温める

別所花梨 島根

表面張力築いて愛は真実か

神野宇乃子 大阪

挟まった奥歯の異物年を越す

赤松ますみ 大阪

回送列車に明後日を載せておく

西 恵美子 宮城

ゆらゆらと視界に入り出て行った

西内朋月 兵庫

夕方になればおさまる二日酔い

あらいじゅんこ 長野

海に降る雪ほどの間や女能

西尾のどか 大阪

お喋りが好きですずめにされました

別所花梨
島根

あの世まであなたを追いかけるメール

正直に粗相を認めているカラス
北田ただよし
大阪

水品団石
静岡

ピンチより少し緊張するチャンス

ネジ一本余ったけれど動いてる
山本トラ夫
静岡

牧野芳光
鳥取

工場のベル時間どおりに闇に鳴る

胡麻炒ってふつつ昔ばなしなど
森下よりこ
和歌山

鳴澤喜八郎
大阪

大胆になれとコスモスまでが言う

1だけが赤いサイコロ苦難中
渡邊理紗
千葉

南野耕平
埼玉

たましひと言へばたましひ逃げさうで

磨いても光れないよと石が言う
河津寅次郎
兵庫

松原未湖
福井

白全部塗ったら母さんに会える

レシートを投げこむ冬の金魚鉢
あらいじゅんこ
長野

松本幸夫
福島

ふり返りふり返り見る冬桜

大石一粹 秋田

妥協案フリーサイズを着せられる

三上博史 栃木

冬枯れて家族思いの街になる

三村一子 大阪

伊藤益男 千葉

串柿の屈託もなく日に晒す

ひっそりとしているけれど混んでいる

あいざわひろみ 長野

谷口さとみ 静岡

どうしても一歩手前で落ちる羽根

自信過剰にしてくれる新ノート

小川しんじ 大阪

早泉早人 大阪

ロボットは無欲オシヤカをどっと出す

慢心を諫めてくれる友のトス

播本充子 東京

石橋芳山 島根

本音ぼろぼろ血压は正常に

誤解です俺は鳥ではありません

合田瑠美子 大阪

井丸昌紀 大阪

真相が漏れるロツカールームから

局所麻酔耳はしっかり聞いている

孝久美智子 福井

小西カツエ 大阪

打ち上げたかぐや宇宙も混んでいる

神様にとくをもらったのは他人

小川一子 大阪

騙されてみよう春には蓮華草

籠島恵子 大阪

秋深し 花屋の菊に風がない

山内美代子 愛知

放そうと思うと花の咲く植木

毛利由美 茨城

チンをして自家製ブルーベリージャム

内田久枝 島根

ニンゲンを破ると夥しい鞘

中井アキ 大阪

あれも駄目これも駄目だと老母縛る

望月 弘 静岡

今どきへ肩入れをする広辞苑

太田 昭 大阪

生涯を決める話に酒が要り

平尾正人 鳥取

形から入り形で終わる恋

神野宇乃子 大阪

初詣無理な願いの絵馬並ぶ

熱田圭詩朗 島根

飯粒に最敬礼をしてしまう

熊谷岳朗 岩手

過去ひとつ突き刺してくるすきま風

宮前秀子 大阪

開幕ベル聴く態勢にクラシック

中前棋人 静岡

公憤を忘れた話ばかりする

「川柳文学」ロキウム
No.28 よりの(つぎ)

北れい子 宮城

鉛筆の芯尖らせてボーダレス

西内朋月 兵庫

石段でパントマイムをする枯葉

山本洵一 東京

きっかけになるか鉢巻き腕まくり

久恒邦子 京都

融けそうな雪でまもっている迷路

西 恵美子 宮城

まわれ右いつもどこかで笛が鳴る

笹田かなえ 青森

目がしらがまるみを帯びる綻びる

赤松ますみ 大阪

さざんかのこぼれ話を聞き漏らす

羊歯ゆれるもう帰れない森がある
笹田かなえ
青森

目覚ましは1+1の繰り返し
渡邊理紗
千葉

鯛雲モテないボクの季節グナ
三上博史
栃木

肩こりに門倉有希のラブソング
播本充子
東京

子午線にわたしの影が立っている
合田瑠美子
大阪

ネギ刻む位のことです揉めている
中前棋人
静岡

シャルウィダンス映画みたいに行きません
石橋芳山
島根

星流れ 酔わねば言えぬことがあり
西内朋月
兵庫

夏が行く桃のひとつに触れぬまま
大石一粹
秋田

店員の笑顔の偽装許される
山内美代子
愛知

信じんと薬は飲めるもんやない
小川しんじ
大阪

迷い込む蜂ルールもなしに飛びまわり
小西カツエ
大阪

安全な核はセカンドオピニオン
望月 弘
静岡

「川柳文学」ロキウム」
No.27 よしの(こしき)

熱田圭詩朗 島根
パレットに零れたままの魚たち

籠島恵子 大阪
気のせいと夫を丸め込んでいる

森下よりこ 和歌山
オール電化でくらす私を知らぬ姑

早泉早人 大阪
内股で歩くライオンシャイである

松原未湖 福井
絹糸を巻いて必殺仕事人

伊藤益男 千葉
なんとなく見ているうちに見てしまう

三村一子 大阪
数式で計れない情もてあます

水品団石 静岡
スポーツのネタが乏しいスポーツ紙

毛利由美 茨城
グループホームそこにあるのは昭和初期

山本トラ夫 静岡
接待を受けてから手が生臭い

松本幸夫 福島
薔薇を切るあなたを捨てるために切る

西 恵美子 宮城
かりそめが煮えるすすきの穂の辺り

井丸昌紀 大阪
罪人の顔で納まる免許証

太田 昭 大阪
壁際で黙って酒を飲む詩人

塾かばん教育論が生ぬるい
中井アキ 大阪

正直がとりえせつせと汗をかく
嶋澤喜八郎 大阪

私をめちやめちやにしてボヘミアン
別所花梨 島根

ひとひらの秋やさしさがやせ細る
太田虚舟 富山

凜として地下で息抜く蓮の花
谷口さとみ 静岡

陽が落ちて決意固めたヒトヨタケ
北田ただよし 大阪

ライバルが泣くからわらうしかななくて
あいざわひろみ 長野

海を見る人となりで海を見る
南野耕平 埼玉

返信ボタン押すと嵐が来る予感
河津寅次郎 兵庫

玉子焼きの匂いがする始発駅
神野宇乃子 大阪

海に降る雨の非力を笑えるか
牧野芳光 鳥取

言い訳の前に出されたハーブティー
あらいじゅんこ 長野

じっと手を見る一千万人
山本洵一 東京

途中下車ばかりしている人という
平尾正人 鳥取

「川柳文学」ロキウム」
No.27 よりの(つぎ)

内田久枝 島根

生い立ちも知らない猫を抱き上げる

宮前秀子 大阪

未練たっぷりまだくすぶっている日記

熊谷岳朗 岩手

瞳は正直好きなあなたに縋りつく

小川一子 大阪

無人駅いつもピエロを待っている

赤松ますみ 大阪

森の扉が開いたり閉まったり

小川一子 大阪

密封が出来ない箱の中の箱

望月 弘 静岡

大臣のことばは聞くな少年よ

北田ただよし 大阪

なわとびを先に誘ったのは銀河

小西カツエ 大阪

ある日ふと浮かんだ月をふところに

小川しんじ 大阪

事故でんなサルからヒトが出来たのは

松原未湖 福井

今日の紙は幽体離脱して困る

熱田圭詩朗 島根

バンザイ三唱の森に囲まれて

籠島恵子 大阪

ひらがなにするといいよとさくらの木

早泉早人 大阪

悩みなど消えていきます海の中

三上博史 栃木

夢列車通過深夜の警報機

水品団石 静岡

邪道から見えた頂上だつてある

石橋芳山 島根

生臭い私のどこが悪いのか

永藤弥平 大阪

提灯のまわり明るい通夜の家

あらいじゅんこ 長野

父の背にシシユフォスを見る月曜日

逆らってみたいと思う流れ星

あいざわひろみ 長野

森下よりこ 和歌山

生きるための鈍感力と孤独力

空気とはこのことだった左の手

熊谷岳朗 岩手

三村一子 大阪

隠し事語りはじめる母の膝

特売の卵みたいな過ごし方

渡邊理紗 千葉

伊藤益男 千葉

崩れるとどっと崩れてしまう垣

錠剤をつぶして辻褄を合わす

平尾正人 鳥取

毛利由美 茨城

幸せはランチのために行くランチ

五百七十二枚の使用済み切手

播本充子 東京

中前棋人 静岡

問題は例え話が上手くない

胡散臭い話トイレに捨ててに行く

河津寅次郎 兵庫

松本幸夫 福島

金魚鉢争いごとを見た夕べ

鉄線花きらりと開く六月尽

合田瑠美子 大阪

お布施が多すぎた 説教が長い
山本トラ夫 静岡

大石一粹 秋田

手花火の広さで思慕を絡ませる

信号は赤が一番役に立つ

井丸昌紀 大阪

巻き戻しばかりしている薔薇の首
中井アキ 大阪

身を守る棘を迂闊に削ぎ落す
太田 昭 大阪

店閉めた書店の軒にツバメ来る
嶋澤喜八郎 大阪

人として生まれ糸一本を手繰り寄せ
西 恵美子 宮城

生まれたよ抱き上げる手のその中に
南野耕平 埼玉

高い樹のてっぺんにきて下りられない
西内朋月 兵庫

日の暮れに山道神は確といふ
牧野芳光 鳥取

苦労まで母は笑いにしてしまう
宮前秀子 大阪

一夜また一夜辛口淡麗酒
笹田かなえ 青森

正論用に配られるゴミ袋
山本洵一 東京

「川柳文学」ロキウム」
No.26 よりの(つぎ)

山内美代子 愛知

合成の写真になぜかうろたえる

赤松ますみ 大阪

幻想が過ぎて階段踏みはずす

神野宇乃子
大阪

コピー機が生み出しているエイリアン

山内美代子
愛知

孝久美智子
福井

メイ・ストーム桜若葉をざわめかす

人も犬も影も光も揺れている

渡邊理紗
千葉

山本洵一
東京

ため息でマイクただ今調整中

首に縄つけて愛していると言う

河津寅次郎
兵庫

笹田かなえ
青森

ユーモレスク幼馴染を誘い出す

水にもあやまち水仙の芳香

伊藤益男
千葉

大石一粹
秋田

ときめいていたときもあるちよつとある

人妻の答と歩く朧月

水品団石
静岡

松原未湖
福井

オルゴールあれから君は踊らない

戦争をすると答える針の穴

松本幸夫
福島

嶋澤喜八郎
大阪

告白をして鉄棒にぶらさがる

ウソついちゃだめよ喉が渇くから

小川しんじ 大阪

超まずいボラだけ群れている運河

あいざわひろみ 長野

けんかした訳は仔犬のぬいぐるみ

播本充子 東京

大丈夫痒みで死んだ人はない

森下よりこ 和歌山

ごはんお代りする子バイクで帰宅する

合田瑠美子 大阪

呼び鈴を押しているのは花の精

牧野芳光 鳥取

月が出るまでに言えない事を言う

小西カツエ 大阪

髪梳きながら知りたいことを気にしたり

中井アキ 大阪

人恋しベサメムーチョの海の上

太田虚舟 富山

沈黙の彼女と読んだかもめーる

南野耕平 埼玉

遠くからきた者として水を飲む

早泉早人 大阪

どん底で忘れてたこと思い出す

井丸昌紀 大阪

おい君も二日酔いかね朝の月

山本トラ夫 静岡

金メッキだから大事にされている

北田ただよし 大阪

曲がり鼻それなりにある指定席

三村一子 大阪

ご存知ね誕生石はエメラルド

太田 昭 大阪

寂しがりや嘘八百を並べ立て

熊谷岳朗 岩手

小川一子 大阪

健康は宝 白髪が語り出す

おがたまの香り今夜は骨拾う

籠島恵子 大阪

平尾正人 鳥取

母の日の話題に家族身構える

すり減った判子日常的な事

望月 弘 静岡

西内朋月 兵庫

地球より重たくなった体脂肪

飲み食いも読み書きもする掘り炬燵

毛利由美 茨城

永藤弥平 大阪

くだらない会話は仲のよい証拠

どうにでもなれと突撃した若さ

三上博史 栃木

宮前秀子 大阪

炎天下喪失感は土の中

尽すことが生甲斐だったかすみ草

西 恵美子 宮城

石橋芳山 島根

からっぽの唯それなりの鶴を折り

何するも…ナガラが基本的姿勢

「川柳文学」ロキウム」
No.25 よりの(つぎ)

赤松ますみ 大阪

くすぐったいものが溜まってゆく葉裏

石橋芳山

島根

特権の拡大カラス増えてきた

北の窓湿った泪落すところ

小川一子

大阪

望月 弘

静岡

議定書に反してしまふ深呼吸

ふところへ帰らないかと呼ぶ砂丘

嶋澤喜八郎

大阪

あいざわひろみ

長野

お星様一緒に堕ちていきますか

竹とんぼ不時着をする草いきれ

太田虚舟

富山

小川しんじ

大阪

コンサートひとりで聴いて風邪を引く

選択肢はどちらも同じ枝毛です

渡邊理紗

千葉

三上博史

栃木

ATMそれぞれ生きている背中

座布団の四隅に溜まる悪巧み

河津寅次郎

兵庫

松原未湖

福井

生煮えの男に蓋をしてあげる

留守電にまかせる揚げ物の途中

毛利由美

茨城

山本トラ夫

静岡

平尾正人

鳥取

熊谷岳朗

岩手

肌と肌奪い合ってはまた眠る

考えて泣いております右の眉

山内美代子

愛知

小西カツエ

大阪

何気なく書いたメモから暴風雨

さくら咲く頃降りそそぐ不純物

永藤弥平

大阪

早泉早人

大阪

雨の道軍手パーしたまま轆かれ

覚悟してこっそり落ちた寒椿

南野耕平

埼玉

松本幸夫

福島

神様の庭に対角線を引く

ある日ふと考えてみる土踏まず

水品団石

静岡

宮前秀子

大阪

言い訳けがだつてだつてとやって来る

魂を売ります 欲しいものがある

牧野芳光

鳥取

三村一子

大阪

美しいものは拡大鏡で見る

くしゃみして桜の蕾おどろかす

笹田かなえ

青森

播本充子

東京

またちがう私になれるさせられる

税務署の隣りに旨いたい焼き屋

森下よりこ 和歌山

コツコツコツ裏窓を問う小鳥

抱いてくださいますか 棘だらけです

西 恵美子 宮城

伊藤益男 千葉

雨しとど生身の雪に触れず春

かたつむり汝も家を背負いたるか

山本洵一 東京

太田 昭 大阪

シャッターを下ろして娑婆の寒さ哉

六割は税と知りつつ吸う煙草

井丸昌紀 大阪

中井アキ 大阪

ひと呼吸おけば桜が良くみえる

結論が出そう豆の芽がうづく

大石一粹 秋田

籠島恵子 大阪

マンネリの私にかかる春霞

考えた言葉に詰りだす蛇口

北田ただよし 大阪

西内朋月 兵庫

嫉妬する目は斜めから刺しにくる

たったひとつの波の音しか聞こえない

赤松ますみ 大阪

合田瑠美子 大阪

深読みは悪い癖です山椿

北田ただよし 大阪

ジョークはこの辺で寝ちがった椿

響き合う性善説を信じよう

森下よりこ 和歌山

山内美代子 愛知

過去形の話で前へ進めない

気づかないだけで地球の導火線

望月 弘 静岡

南野耕平 埼玉

集まってくるな明日のじやまになる

あくびする小春日和の会議室

渡邊理紗 千葉

播本充子 東京

書き出してみる死ぬまでにしたい事

ぶらんこが揺れる男の座標軸

嶋澤喜八郎 大阪

中井アキ 大阪

パープルな音を出してる恋敵

嘘泣きと一緒にしまっ赤い靴

西 恵美子 宮城

永藤弥平 大阪

貧乏な周平画く武士が好き

思案がずらり背もたれのないベンチ

三上博史 栃木

水品団石 静岡

生きるとはお金が減ってゆくことだ

「川柳文学」ロキウム
No.23 よしの(しんき)

毛利由美 茨城

督促を無視しない程度のずぼら

三村一子 大阪

海山を生きてはんなり帯結ぶ

笹田かなえ 青森

くちうつし飲み込んだのは冬の音

熊谷岳朗 岩手

足の裏さびしきことはないですか

石橋芳山 島根

発酵の途中で追加する怒り

山本洵一 東京

ネクタイを締めて紳士に変る鼻

あいざわひろみ 長野

幸せの詰まったしっぽつかまえた

太田虚舟 富山

てっぺんの枝はいいなと想う下枝

小西カツエ 大阪

毒がまだ足りずに影がうるたえる

合田瑠美子 大阪

すばらしい笑顔が笑顔連れてくる

小川しんじ 大阪

どう見ても重労働やピアノリスト

早泉早人 大阪

わだかまりすんなり溶けた初日の出

山本トラ夫 静岡

お互いに弱みがあつてよく喋る

太田 昭 大阪

補聴器を着けて無口な友に会う

伊藤益男 千葉

潮の芽を眺めています冬帽子

松原未湖 福井

暗号は猫の絵文字で書いてくる

牧野芳光 鳥取

定年のサアこれからは元をとる

西内朋月 兵庫

ひとり酒呷りに来たか過疎の月

利光正行 大阪

好きなだけ遊んでおいでブーメラン

平尾正人 鳥取

突然の朝日は勝手過ぎないか

小川一子 大阪

踏ん切りもついた椿の落下点

河津寅次郎 兵庫

休肝日まんまと嵌る誘蛾灯

井丸昌紀 大阪

元日も昨日と同じキタミナミ

松本幸夫 福島

限りある命軽い日重たい日

宮前秀子 大阪

苦労しました忘れましたと書く自伝

赤松ますみ 大阪

新鮮な耳を配達いたします

籠島恵子 大阪

いつだって椅子が足りないのがこの世

播本充子

東京

ほれごらんやっぱり火傷したでしよう

松原未湖

福井

牧野芳光

鳥取

取り換えた鼻がときどきはずれます

ロバの背に揺られて春がやってくる

嶋澤喜八郎

大阪

毛利由美

茨城

絵に描いた餅がぺらぺらよく喋る

末っ子は生まれながらの社会人

笹田かなえ

青森

あいざわひろみ

長野

ガーベラのもの言いたげに曲がる茎

記憶からきみを消したい失恋忌

三上博史

栃木

小川しんじ

大阪

あっさりという意味を掬った電子辞書

年金へいのちが届きそうにない

合田瑠美子

大阪

小西カツエ

大阪

決断はぎゅっと結んだ靴のひも

ひっそりと空き家を探る秋の風

山本トラ夫

静岡

水品団石

静岡

誤字のない求愛にためらっている

お別れはきよしこの夜あんちくしょう

永藤弥平 大阪
落城の石垣無念語りあう

山内美代子 愛知
安売りで手足の欠けた蟹を買う

小川一子 大阪
畳むには少し折り目の多い癖

南野耕平 埼玉
とりあえず冬だからって言うておく

太田 昭 大阪
眠くなるから相槌打たぬことにする

中井アキ 大阪
取り扱い注意私の虚栄心

籠島恵子 大阪
計画を立ててしまった悪だくみ

伊藤益男 千葉
スッキリとしない頭にポツリ雨

石橋芳山 島根
抜け落ちているのが俺の首部分

太田虚舟 富山
くもの巣に外れ馬券が揺れている

森下よりこ 和歌山
ばあちゃんの二十四色ぬりえです

望月 弘 静岡
前身は匿名にした再生紙

熊谷岳朗 岩手
これが僕なんです乱筆ではないぞ

北田ただよし 大阪
散りながらファジーな答だす紅葉

「川柳文学」ロキウム
No.22 よりの(つぎ)

渡邊理紗 千葉

ガムのまま捨てておきたい愚痴がある

磨りガラス恐れることはありません

赤松ますみ 大阪

西 恵美子 宮城

おねがーいと飛ばす 紙ふうせん

平尾正人 鳥取

夕立へさっと開かぬ傘ばかり

井丸昌紀 大阪

棒二本引いて消したいあれやこれ

西内朋月 兵庫

公園で挨拶されるだけの縁

三村一子 大阪

木枯らしにあらわになった柿光る

宮前秀子 大阪

ぼつりぼつりと古い話を五色豆

孝久美智子 福井
生も死も一切空の彼岸花

石橋芳山 島根
くちばしがなくて卵が割れません

小川しんじ 大阪
飛んでいる鳥を気の毒がる駝鳥

小西カツエ 大阪
正座した紙人形の重いひざ

渡邊理紗 千葉
美しくなるため浮輪を放さない

伊藤益男 千葉
街路樹を見上げて妻とすれちがう

三村一子 大阪
強がりを可愛くないと白い萩

三上博史 栃木
薬指エロスはいつも傍観者

太田 昭 大阪
運命線のうねりの中でよく遊ぶ

森下よりこ 和歌山
ありがとう毎日産みたてのたまご

嶋澤喜八郎 大阪
秋桜温いうどんが食べたいな

太田虚舟 富山
逆光に立つ 骨格きれいに透けている

松原未湖 福井
大蛇ですかひまわりですか三女です

「川柳文学」ロキウム」No.21 よしの(こしき)

金を出せみたいなパーに囲まれる
南野耕平 埼玉

守るものあって刃を抜きました
あいざわひろみ 長野

白線の外で目覚めてゆく快楽
中井アキ 大阪

ずぶ濡れの背中離してなるものか
笹田かなえ 青森

ケータイを置いて大事な人に逢う
山本トラ夫 静岡

夜が明けるまでには終える四捨五入
平尾正人 鳥取

足軽も侍試食などしない
永藤弥平 大阪

スーパードパートの友にちよつと声
毛利由美 茨城

あなたはやさしすぎます 秋の日に熱爛
熊谷岳朗 岩手

群れているけれどもそれは結果論
水品団石 静岡

とろとろと寝てるとろとろ見つめてる
小川一子 大阪

長距離電話時雨模様の話から
籠島恵子 大阪

乾涸びた身体を戻す湯に浸る
望月 弘 静岡

一句抜けるまで長い長い時間
井丸昌紀 大阪

「川柳文学」ロキウム」No.21
よしの(うじき)

無免許の医師はやさしく親切で
山内美代子 愛知

あの頃の夢ばかり見る昨日今日
堀江としを 大阪

急ブレーキかけないで枕の中の貨車
西 恵美子 宮城

ぶつかったポストに頭下げている
西内朋月 大阪

自画像の輪郭線が描けない
合田瑠美子 大阪

待っているところへ時雨だけが来る
宮前秀子 大阪

要らぬ物売っているから買って来る
牧野芳光 鳥取

足元に満ちてくるのは澄んだ水
赤松ますみ 大阪

牧野芳光

鳥取

石橋芳山

島根

階段を数えて足を踏み外す

収まりは付かず抜き身のままである

太田虚舟

富山

籠島恵子

大阪

野の花を盛って秋刀魚を焼き上げる

あみだくじ辿る途中の現在地

松原未湖

福井

平尾正人

鳥取

妖精が降りて動いた二、三枚

三列に並ぶが動かない二列

山本トラ夫

静岡

西 恵美子

宮城

人事課に行き根性を見せてくる

千本目の針が引っ掛かったままの喉

嶋澤喜八郎

大阪

伊藤益男

千葉

素うどんの明快さには勝てません

捨石の忍耐力を試される

笹田かなえ

青森

森下よりこ

和歌山

濡れたものの上へとぬれたものを置く

呪文となえてサラダを食べて見ることに

水品団石

静岡

パラパラを踊る 責任感を持ち

翌日の雨が総括する祭り
三上博史
栃木

くちばしが溶けて氷の鳥無口
三村一子
大阪

妻という友と茶漬けをすすり合う
太田 昭
大阪

地下街で雨の匂いのするパスタ
小西カツエ
大阪

癌検査 結果を待っているベンチ
西内朋月
兵庫

ハーブティーそんなに罪は軽いのか
小川一子
大阪

雷の嫌いな女とデートする
望月 弘
静岡

最高気温知ってよけいに暑くなる
山内美代子
愛知

選択肢なきまま臍は臍である
南野耕平
埼玉

本日晴天行方不明もいいでしょう
松尾冬彦
神奈川

厄介なとこに困った国がある
小川しんじ
大阪

目玉焼きの笑顔で君といたんだ
渡邊理紗
千葉

深いところ探って来ます梅雨の空
熊谷岳朗
岩手

エスカレーターちよつと休もう口喧嘩
永藤弥平
大阪

針の穴くらいで揺れてくる妬心
中井アキ
大阪

ゆれうごく心あんこかクリームか
山本洵一
東京

父の手は大きかったな丸木橋
利光正行
大阪

雨雲を搾って梅雨が終わります
あいざわひろみ
長野

お隣の人を選べる自由席
毛利由美
茨城

サイコロを振るたび月が出てしまう
赤松ますみ
大阪

道草の風はそよそよ心地よい
宮前秀子
大阪

黙礼をして車椅子発進す
堀江としを
大阪

妖精が見え隠れする絵の具箱
孝久美智子
福井

近いうちにと言われて会ったことがない
井丸昌紀
大阪

かまきりは本気人間の慢心
合田瑠美子
大阪

あいざわひろみ 長野

ごめんねと人差し指で書いてみる

小川しんじ 大阪

ロボットがミス悪いのはわてでつか

西 恵美子 宮城

卵を産んだのはスクランブル交差点

三上博史 栃木

夜が明けて静止画像が動き出す

小川一子 大阪

菜の花の中で本当にいなくなる

望月 弘 静岡

うす紙を剥して地獄絵図に会う

森下よりこ 和歌山

ブナ樹林芽吹くあたりの朧月

松原未湖 福井

弾まないゴム鞆を置くショーケース

宮前秀子 大阪

ライヤーが手許に残るポロンポロン

太田虚舟 富山

もう鳩のでない帽子を他人にやる

水品団石 静岡

見せたがる痛み口内炎の穴

伊藤益男 千葉

まわるすし瞳を奪い合っている

籠島恵子 大阪

六十になるぞなるぞと砂時計

鳴澤喜八郎 大阪

現在地知らずに蝶が飛んでいる

山本トラ夫 静岡

幸せを半音下げて噛み締める

毛利由美 茨城

人よりもよく歩く方向音痴

平尾正人 鳥取

アクセルとブレーキどちらにも負い目

中井アキ 大阪

高のぞみした日ぎっくり腰になる

太田 昭 大阪

真っ白なシャツが不安を駆り立てる

井丸昌紀 大阪

守るものしつかりあって青テント

牧野芳光 鳥取

赴任地でいつでも逃げる準備する

熊谷岳朗 岩手

生きている淋しさなのか曇り空

笹田かなえ 青森

置くところに置くとき動いてしまう指

利光正行 大阪

躓いた石にどやされ目を覚ます

西内朋月 兵庫

株屋から電話のベルで起こされる

渡邊理紗 千葉

底意地の悪い東京の夜景たち

永藤弥平 大阪

花いっぱい柩を重くするばかり

「川柳文学」ロキウム
No.19 よりの（つぎ）

小西カツエ 大阪

やわらかな春のキャベツと睦み合い

赤松ますみ 大阪

松ぼっくりの中で発酵させる耳

堀江としを 大阪

肩揉むで呉れる認知の妻である

小西カツエ
大阪

ひとつずつ突いて泣かすもいちご

暇そうな夫が開ける冷蔵庫

毛利由美
茨城

水品団石
静岡

スランプはあるさ落ち込むことはない

まだ続く合衆国へ片思い

山本トラ夫
静岡

牧野芳光
鳥取

硬筆で描くと淋しい顔になる

姉さんはすっかり猫になり終えた

松原未湖
福井

孝久美智子
福井

けんめいに生きているのよ吊し柿

そろそろとたそがれ時を編んでいる

あいざわひろみ
長野

笹田かなえ
青森

回想の細く流れる水の音

センサーの温度差だった発火点

大田虚舟
富山

森下よりこ
和歌山

黄水仙君に出会えてほっとする

独り居る昼にお墓のご案内

伊藤益男
千葉

平尾正人
鳥取

引いて足す事に疲れて足して引く

「川柳文学」ロキユウム
No.18 よろ（つぎ）

中井アキ 大阪

深呼吸して賛成の席に付く

宮前秀子 大阪

二時間ほど行方不明に 無料パス

永藤弥平 大阪

灯籠を眺め余命を考える

鳴澤喜八郎 大阪

いい歳になっても姉に叱られる

太田 昭 大阪

黙秘権これがせめての自己主張

利光正行 大阪

躓いた石が一服せよと言う

小川しんじ 大阪

賽銭の額だけ信じんと損や

籠島恵子 大阪

義理一つ欠いて見ている春の雪

西 恵美子 宮城

身の裡をまっすぐ走る水回廊

小川一子 大阪

家中がやさしくなつて梅が咲く

西内朋月 兵庫

安定剤 袋いっぱい貯めて春

望月 弘 静岡

妻の足触れて低温やけどする

井丸昌紀 大阪

無料セール住所氏名を書かされる

三上博史 栃木

客観も主観も要らぬ春霞

「川柳文学」ロキウム」
No.18 よりの(つぎ)

熊谷岳朗 岩手

音合わせしなくていいよ 春の雨

赤松ますみ 大阪

輪唱が耳から離れない月夜

堀江としを 大阪

ショートステイの妻いま何をしてるやら

渡邊理紗 千葉

水仙が咲いてる距離で手をつなぐ

芳香剤だけが元気な家だった

山本トラ夫 静岡

伊藤益男 千葉

落ちながらプラス思考になる夕日

カーテンの狭間で小春日が遊ぶ

小西カツエ 大阪

小川しんじ 大阪

御自愛をなんぼしたかて風邪は引く

ヒイラギは素朴 空には奴風

嶋澤喜八郎 大阪

あいざわひろみ 長野

夕焼けはファーストキスの目撃者

気持ち良く忘れるためにメモを取る

平尾正人 鳥取

三上博史 栃木

憎まれる優越感を弄ぶ

悲しいと悲しい歌はうたえない

牧野芳光 鳥取

籠島恵子 大阪

約束へ雪がどんどん降ってくる

一匹の鬼と熟してゆく絆

中井アキ 大阪

西 恵美子 宮城

おとぎ話はもう止めましょう火打石

「川柳文学」ロキウム
No.17 よしの(しんき)

森下よりこ 和歌山
いい日だなハングライダー舞っている

永藤弥平 大阪
戦友の軍歌忘れず口ずさむ

大田虚舟 富山
三枚目になって地酒の酔いにいる

小川一子 大阪
追ってくる月に笑顔を返してる

望月 弘 静岡
煩惱がいくつあったら唯の人

西内朋月 兵庫
食欲がないのに呉れたお弁当

宮前秀子 大阪
明日はきつと目覚めてくれる 髪を梳く

熊谷岳朗 岩手
動いてはならない雪が白すぎる

笹田かなえ 青森
すいすいとナイフ滑らせ逢う逢わない

井丸昌紀 大阪
真っ白な餅じわじわと焦げていく

太田 昭 大阪
こわれそうな夢を箆笥に仕舞い込む

井上恵津子 大阪
花束をほどいて花の深呼吸

毛利由美 茨城
のけぞって座れば満腹の形

水品団石 静岡
そういえば昨日も言った 明日がある

「川柳文学」ロキウム
No.17 よりの(つぎ)

赤松ますみ 大阪

腕まくりするたび傷が増えている

堀江としを 大阪

認知の妻に遂に怒鳴って淋しいネ

水品団石 静岡

お友達のようにインフォームドコンセント

象の目はやさしいという思い込み

井丸昌紀 大阪

笹田かなえ 青森

さみしそうだから引き出し開けましょう

百叩きされても黒を黒と言う

太田 昭 大阪

小西カツエ 大阪

月青く下り列車は息を吐く

心にもない事を言う処方箋

平尾 正人 鳥取

熊谷岳朗 岩手

簡単に笑ってしまう午後である

どちらかにしてよ 泣くのか笑うのか

嶋澤喜八郎 大阪

宮前秀子 大阪

病院の窓 花が咲き花が散り

秋のドア思いがけない訪ね人

森下よりこ 和歌山

永藤弥平 大阪

杖ついた石の地蔵は旅がすき

言葉以上コトバ以下でもないことば

三上博史 栃木

あいざわひろみ 長野

論じてるオトコ 疑ってるオンナ

牧野芳光

鳥取

天気予報びったり当たるから困る

飛行機の降りる角度で病んでいる

(市子改め)

小川一子

大阪

渡邊理紗

千葉

本命の彼女ではない冬花壇

二次会へ黙っていても数のうち

西内朋月

兵庫

葛輪富弘

大阪

でかい契約取れたうれしい午後のお茶

白菊を汚さぬように息を吐く

籠島恵子

大阪

中井アキ

大阪

その時が来るまで眉は丸く描く

薬飲むただ人並みになりたくて

山本トラ夫

静岡

伊藤益男

千葉

引き隠ることで貫くマイペース

振り向けば炎だった氷だった

西 恵美子

宮城

井上恵津子

大阪

痛みにはよく効く本を読んでいる

耳底に黄砂がたまる時雨れる日

太田虚舟

富山

望月 弘

静岡

土の道ここから犬が生きかえる

店名がなければ好きなカレンダー

毛利由美

茨城

「川柳文学」ロキウム」
No.16
よりの(つぎ)

山本洵一 東京

飛び去った暖めるだけ暖めて

小川しんじ 大阪

カネだけにこころを開く販売機

赤松ますみ 大阪

ゆず風呂にぶかぶか浮いているうわさ

堀江としを 大阪

私にもあった眠るといふ自由

小川しんじ 大阪

お飾りですつといなさい非常ベル

小西カツエ 大阪

いのち短し桃と未来の話など

西内朋月 兵庫

しがらみを切る包丁を買いにい

籠島恵子 大阪

生きている大中小の音たてて

永藤弥平 大阪

錆釘を抜くと哀しい音がする

太田虚舟 富山

カラフルな私語をあつめるフェミニスト

孝久美智子 福井

傷ついた右手なだめる深夜便

西 恵美子 宮城

指紋いっぱい残すふかい闇の中

嶋澤喜八郎 大阪

散り際に唇を噛むさるすべり

松尾冬彦 神奈川

反戦歌ちゃんと唄ったことがない

森下よりこ 和歌山

駅を降りたらドンと上がった大花火

中井アキ 大阪

年金の暮らしに恋が来て騒ぐ

三上博史 栃木

幸せに気づいていない窓明かり

山本トラ夫 静岡
ロボットに改憲論を叩き込む

小川市子 大阪
点滴をしてる手の爪よくのびる

毛利由美 茨城
ただ箸を入れ忘れただけの不幸

井上恵津子 大阪
ガンジの顔で揚げパン二つ買う

望月 弘 静岡
見ぬふりをした日から目がかすみ出す

山本洵一 東京
認知症ではあるが鋭いことも言う

伊藤益男 千葉
抜かれても抜き返せないみずすまし

水品団石 静岡
二千円札でヒコーキ折っている

渡邊理紗 千葉
惚れたなら負けるのが恋信号機

笹田かなえ 青森
一秒に満たない昔です、落ち葉

葛輪富弘 大阪
鯨を捕らんと魚いなくなる

太田 昭 大阪
付いてきた影が他人になりたがる

井丸昌紀 大阪
居心地が良くなったなら退院だ

宮前秀子 大阪
癌なんて笑い飛ばしてやりなさい

「川柳文学」ロキウム」
No.15
よりの(つぎ)

平尾正人

鳥取

名も知らぬ人と乾杯だけはする

赤松ますみ

大阪

紅玉を齧ると虹が立っている

堀江としを

大阪

病妻が捻ると弱い水の音

平尾正人

鳥取

水品団石

静岡

クリックで始まりクリックで終わる

サラ金のビル達磨落しによく似てる

笹田かなえ

青森

松尾冬彦

神奈川

向日葵の頷くままに行きなさい

まるで絵巻を見ているような交差点

小川市子

大阪

小西カツエ

大阪

猜疑心みんな引き受け茄子の花

ひと想う黄昏色の常夜灯

西内朋月

兵庫

森下順子

和歌山

病院の闇に螢が飛んでいる

田植えよろこびいつも終わった日はお肉

牧野芳光

鳥取

山本洵一

東京

洗濯物に潮の香りがついて来る

空中転回させて伝える言葉たち

伊藤益男

千葉

井上恵津子

大阪

ありがたい一日だった暇だった

行先のわからぬバスに乗っている

西 恵美子

宮城

合鍵は不要です原っぱにいます

永藤弥平 大阪

留守番の犬淋しくて遠吠える

太田 昭 大阪

老老介護接ぎ木の瘤を締め直す

渡邊理紗 千葉

マンモスを追う意気込みで愛してね

小川しんじ 大阪

ゴキブリも蚊もきつと人好きなんや

三上博史 栃木

置き去りの時間に出会う栗の花

中井アキ 大阪

責任は君だ君だと風が言う

井丸昌紀 大阪

幸か不幸か未だ独身だ それで

山本トラ夫 静岡

舌荒れる今日の論陣張り通す

籠島恵子 大阪

ひまわりが先頭さんでいてくれる

望月 弘 静岡

抵抗をしないと緞帳降りてくる

毛利由美 茨城

新顔が加わった春のバス停

嶋澤喜八郎 大阪

民謡を聞かせて山を寝つかせる

孝久美智子 福井

もう誰も住まない家の百日紅

葛輪富弘 大阪

ビル近くの祭り花火は味気ない

「川柳文学」ロキウム
No.14
よりの(つき)

宮前秀子
大阪

お元気ですか 骨壺を振ってみる

太田虚舟
富山

破断線しっかり引いていくふたり

赤松ますみ
大阪

伸び縮みしながら月に近くなる

堀江としを
大阪

病妻の背流しつ不覚なる涙

太田虚舟

富山

中井アキ

大阪

点線をゆっくり剥がす袋とじ

世話好きが魔法をかけにやってくる

山本トラ夫

静岡

牧野芳光

鳥取

ひまわりを後ろから見るお馬鹿さん

マニュアルのとおりには笑うアルバイト

井上恵津子

大阪

笹田かなえ

青森

疼く日はシーラカンスになる都会

こいびとの恋のかたちになれるか になれる…

渡邊理紗

千葉

西 恵美子

宮城

さようなら切符みたいな用でした

ハンカチにアイロン掛けて出直すわ

利光正行

大阪

孝久美智子

福井

定量の涙をこぼすペットロボ

大甕がずらり坐っている怖さ

籠島恵子

大阪

西内朋月

兵庫

時々はルビを外して現在地

靖国へ参拝をしたことはない

平尾正人

鳥取

説明と同意で忙しい書類

山本洵一 東京

言い返さずにじっと聞いている

正面にテレビがあれば父の席

望月 弘 静岡

小西カツエ 大阪

鉢巻をしたことのあるお月様

虫眼鏡時間を止めて覗き込む

三上博史 栃木

井丸昌紀 大阪

通夜はよい句会へ行けと師薫風

いま少しすることがある 命乞い

宮前秀子 大阪

松尾冬彦 神奈川

雄雌と見分けられたら死ぬ定め

五月病に五月の風はただ寒し

小川しんじ 大阪

小川市子 大阪

懺悔する風は木の葉をまた揺らす

不揃いの皿に我が家を語らせる

太田 昭 大阪

嶋澤喜八郎 大阪

振り上げた拳下ろせば音がする

待たされただけで診察無事終わる

水品団石 静岡

葛輪富弘 大阪

指定席確認車掌超多忙

気合など入れない日々のお弁当

毛利由美 茨城

「川柳文学」ロキウム」
No.13 よりの(つぎ)

永藤弥平 大阪

アーケードゆっくり歩く街が好き

森下順子 和歌山

羽搏いて見るたび空は土砂降りに

赤松ますみ 大阪

潮騒をセットしてある左耳

堀江としを 大阪

音消したテレビ認知症なる妻と観る

森下順子
和歌山

百面相ひとりしてみる春の宵

剣玉がうまい 友達いてません

太田虚舟
富山

山本トラ夫
静岡

猫が追うハエの羽さえ進化論

風吹いてこんなに涙もろくなる

小川市子
大阪

葛輪富弘
大阪

働かぬくせに履歴書書きたがる

春向きの甲羅チャンネル切り替える

嶋澤喜八郎
大阪

宮前秀子
大阪

ビルの谷間 我が家残して陽は昇る

赤ピーマンの中でもしやとひとりごと

小西カツエ
大阪

籠島恵子
大阪

蠟梅がこともなく咲き終えている

ニートには死んでもならぬ缶集め

小川しんじ
大阪

松尾冬彦
神奈川

やめときな残り物には毒がある

そんな瞳で見ないで肩が凝ってくる

中井アキ
大阪

井上恵津子
大阪

如意棒で追いかけているつむじ風

スーパーで暇な夫婦といつも会う

永藤弥平
大阪

「川柳文学」ロキウム
No.12 よりの(つぎ)

渡邊理紗

千葉

西 恵美子

宮城

冗談にとれる秘密をまず話す

小さじいっぱいいつも多すぎる

西内朋月

兵庫

三上博史

栃木

酒飲みの同じ話がまだ続く

チューリップ風に気疲れして枯れる

太田 昭

大阪

赤松ますみ

大阪

写経して仏の息を吸いにゆく

笑わせてくれる鏡を買いにいく

笹田かなえ

青森

堀江としを

大阪

くちあたりよければなにもかも許す

家族愛で直さむ妻の認知症

望月 弘

静岡

ワイパーをかけて世間を広くする

毛利由美

茨城

満員で開きつ放しの自動ドア

井丸昌紀

大阪

帰ったはずの上司目の前にいる

三上博史

栃木

井上恵津子

大阪

屋根の上雲の意見を聞いてくる

鱗はらり人魚になったチューリップ

森下順子

和歌山

葛輪富弘

大阪

春の宵風の便りを聞き洩らす

疎開寺院の百日紅よ元気かい

毛利由美

茨城

小西カツエ

大阪

リフォームに出してお高い服となる

水平思考冬のポストは寒の入り

永藤弥平

大阪

嶋澤喜八郎

大阪

いかないでシャンソン歌う暗い酒場

九割は出まかせあとはもんじゃ焼き

西 恵美子

宮城

小川市子

大阪

芽が出たよ今ならバスに間に合うわ

サクサクと落ち葉男と踏んでいる

太田虚舟

富山

小川しんじ

大阪

みんな他人ゆめを契ってきた小指

真似出来ますかと新札が光る

渡邊理紗

千葉

松尾冬彦

神奈川

マッチ売りの少女みたいに幸せよ

一抜けたとたんに輪から棒になる

「川柳文学」ロキユウム
No.11
よりの(つぎ)

宮前秀子
大阪

ほっとする 友の何でもない話

マッチ売り少女は失業しています

望月 弘
静岡

井丸昌紀
大阪

肩幅の広い男で頼りない

巣の中でこのまま眠り込みそうだ

山本 洵一
東京

太田 昭
大阪

七人の敵を味方にして生きる

立ち止まる度に水たまりが出来る

籠島 恵子
大阪

両澤行兵衛
大阪

負け惜しみ地道が好きと言っておく

化けられぬように鏡が置いてある

赤松 ますみ
大阪

笹田かなえ
青森

新しい恋 新しい靴が要る

快くなれば髪染め給え妻の病む

堀江 としを
大阪

西内朋月
兵庫

瞑想の河童に滾るみどりの血

中井アキ
大阪

母さんのとても大きな避雷針

籠島恵子
大阪

問題はおんなじ躰き方をする

落城の石垣月とまだ語る

永藤弥平
大阪

太田 昭
大阪

寂しげなブランコを漕ぐ応援歌

味覚嗅覚おかしくなったこと秘密

森下順子
和歌山

小西カツエ
大阪

鬼胡桃不燃可燃と転げたり

泣き真似ができる便利な顔がある

松尾冬彦
神奈川

三上博史
栃木

子はペットペットは子供少子国

つりがわの脱力感で人を待つ

渡邊理紗
千葉

井上恵津子
大阪

おとうさん小判と笹が煮えました

傘を乾すもう濡らさぬと言いながら

山本洵一
東京

小川しんじ
大阪

日ごと手に負えぬ姿になる仏花

後ろからの若い話を聞いている

宮前秀子
大阪

笹田かなえ
青森

雨の音がしじゅうしていた秋の部屋

つまずいた場所で回遊魚になろう

西 恵美子
宮城

「川柳文学」ロキウム
No.10 よし (つぎ)

葛輪富弘 大阪

英霊迎えに駅へ村人僕達も

来るなど言うて心待ちする孫娘 神奈川

井丸昌紀 大阪

被災地へ愛は形にして贈る

夕焼けがきれい殺意のわく刻で 太田虚舟 富山

望月 弘 静岡

親指がいらだち出した待ち時間

私を透かすと蒼いあおい海 中井アキ 大阪

西内朋月 兵庫

居酒屋の安いところは知っている

振られてもめそめそしない青い空 嶋澤喜八郎 大阪

小川市子 大阪

欠伸してふたりで降りる観覧車

きのうでもあしたでもない森にいる 赤松ますみ 大阪

毛利由美 茨城

私より長生きしそう 義母と亀

寝返りをする病妻の薄き胸 堀江としを 大阪

両澤行兵衛 大阪

パン生地を男が似合う顔にする

鳴澤喜八郎
大阪

ひとりでも生きていけます星食べて

雲一つない青空に見えている

井丸昌紀
大阪

両澤行兵衛
大阪

水に浮く銀杏俺に似てないか

わたくしの湯呑みばかりがよく割れる

籠島恵子
大阪

三上博史
栃木

ワンルーム自己完結は綻びる

深層水閣にひそんでいたい水

永藤弥平
大阪

西 恵美子
宮城

フクロウに聞かされている美辞麗句

歓迎も見送りもせぬパチンコ屋

小川しんじ
大阪

中井アキ
大阪

魂に触れるまで拭くサングラス

はめられた顔で手品に見とれる子

毛利由美
茨城

望月 弘
静岡

北方の霧へ一球投げしておく

ゆっくりと過ごせないから熊が出る

葛輪富弘
大阪

宮前秀子
大阪

パズル完成 やっとわたしを解き放す

彼岸花辿り仏に逢いにゆく

太田 昭
大阪

「川柳文学」ロキウム No.9 (つぎ)

山本洵一 東京

思い直して追伸に書いておく

成人の孫美しい秋日和

堀江くに子 大阪

小川市子 大阪

父ひとり母がふたりの麦を刈る

泣きボクロとるとのっぺらぼうの僕

松尾冬彦 神奈川

八百村みのる 神奈川

民間に委せ委せと丸投げす

フリーター低空飛行ではないか

井上恵津子 大阪

渡邊理紗 千葉

ヒマワリの角度で君におじきする

日溜まりがだんだん沼になってくる

赤松ますみ 大阪

太田虚舟 富山

いつの日かペットボトルの乱に遭う

今度逢うたら曾我さんのようなキス

堀江としを 大阪

利光正行 大阪

稜線を野に入れ山は立ち上がる

西内朋月 兵庫

見なくても起きれば点けているテレビ